

人文会 ニュース

業務用

座談会 □

人文書・読者層の変貌と対応..... 1

——編集者と書店の視角の狭間から——

煥乎堂販売促進部長	岡田 芳保
紀伊國屋書店本店次長	細川 貴美江
文鳥堂書店代表社員	吉田 武紀
筑摩書房編集部々長	中島 岑夫
岩波書店編集部副部長	岩崎 勝海
大月書店編集部々長	佐保 勲
〈司会〉日本評論社	醍醐 隆

三省堂書店・研修会報告..... 25

〈人文書講座・Ⅲ〉

人類の森・知の森・危機の森.....平川 俊彦 27

——文化人類学展望——

人文会会員社・新名簿..... 34

'83. 6

38

法政大学出版局

中世の笑い

《謝肉祭劇十三番》

藤代幸一編訳 禁欲を強いられる四句節の反動的先取りとしての謝肉祭／その乱痴気騒ぎのなかで演じられた素朴かつ狼狽・奔放なドラマは中世民衆の肉声を伝える。本邦初訳の13篇を収め、訳注・解説を付す。定価1800円

ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら 藤代訳／定価1600円

食料獲得の技術誌

W. H. オスワルト／加藤晋平・他訳 原住民族36例の食料獲得用具を比較・検討し、人類の物質文化の基礎をあつづける。定価2500円

アジア稲作の系譜

渡部忠世 中国・インド・インドシナ半島を踏査し、自然環境と基層文化との関わりの中で稲作の源流と伝播経路を辿る。定価1800円

東京都港区南麻布2-8-4／振替・東京6-95814

歴史と人間

雑感集3

橘川 文三著

日本の政治思想・文学の思想に対して独自の立場から内在的な省察を加えその根拠を問う七〇年一八〇年代初頭のエッセイ、研究スケッチ、紀行文等。四六判上製・価二〇〇〇円

原発のある風景

柴野 徹夫著

【全2冊Ⅱ完結】

下巻では、原発がもたらした人間と地域社会の荒廃、原発下請け労働者の労組結成、衝撃的な関西広域原発極秘計画等を報告する。写真・図版多数。四六判上製・価一六〇〇円

未来社 電話・代表 (814) 5521

東京・文京小石川3-7

ノモスとピュシス

ギリシア思想におけるその起源と意味

過程と実在

2 コスモロジーへの試論

ホワイットヘッド 世界の宇宙論的解明を試みた20世紀哲学の記念碑的著作。校訂版完訳成る。平林康之訳 1・2 各 800円

ストーンヘンジ

天文学と考古学

F・ホイル 謎の巨石遺構に科学の光を当て、その目的が日食・月食の予知にあったことを解明する。荒井喬訳 3500円

ローマ都市の起源

E・イエンユタード 自ら手がけた発掘の成果を駆使して古代史に新鮮な衝撃を与える。図版226枚収録 浅香正訳 3500円

東京文京本郷3丁目17-15

みすず書房

人間のこころ

小口忠彦著

●心理学はどう答えるか

人間のこころが最も完成に近接したバーナリテイとは何か。『自己実現型バーナリテイ』の本質を説いた。 一六〇〇円

カルチュア・シヨックと日本人

荻野恒一・星野 命編

●異文化対応の時代を生きる 日本人が海外でビジネスをし生活

を続ける時に生じやすい『異文化への不適応』の問題を多角的に追求。 一四〇〇円

有斐閣選書

有斐閣／東京都千代田区神田神保町2

人文書・読者層の変貌と対応

——編集者と書店の視角の狭間から——

煥乎堂販売促進部長

岡田 芳保

紀伊國屋書店本店次長

細川貴美江

文鳥堂書店代表社員

吉田 武紀

筑摩書房編集部部長

中島 岑夫

岩波書店編集部副部長

岩崎 勝海

大月書店編集部部長

佐保 勲

△司会▽日本評論社役員

醍醐 隆

(発言順)

一 人文書という概念(Ⅰ)

——書店の視角から

司会 人文会は、『人文会ニュース』を通じて、毎号、専門書とりわけ人文書の普及と拡販に力点をおいて、人文書が当面する問題を取りあげ、版元サイドから、或いは流通の側面から或いは読者と日常もつとも密接に係わっておられ、読者の変貌の態様についても敏感にそれを受けとめておられる書店さんの視点から……と様々な角度から問題を提起してきましたが、今回は、読者をどのように獲得してゆくか、「人文図書の当面する問題について」ということで、人文書の作り手である版元の編集責任者の方々と、人文書には特に強い関心を持ち、意欲的な販売活動を通して毎日多くのお客さんと接しておられる書店さんの方々にお集りをいただき、人文書の作り手である編集者が、今どういう問題意識をもって人文書を企画し、刊行しているか、また捌き手と申しますか、書店さんの方々には、版元の編集者に対して、どういうご意見、ご

注文をもっておられるか、その辺のクロスする問題についてお互いにお話し合いを願ひ、その中から人文書の当面する問題や今後の展望などを探ってみたいと思っております。

そこで人文書という場合のイメージですが、例えば哲学、思想、心理、宗教、社会、歴史、文化など非常に範囲もひろく、また学術専門書から一般教養書といった具合にです、内容的にも水準の面からも差違がかなりあって、なかなか簡単には枠をはめ難いのですが、これもお話し合いのなかで整理できたらと思っております。

今日は、特に結論をひき出すというのが目的の座談会ではございませんので、日頃お考えになっている問題について忌憚のないお話しを伺えれば幸いです。

そこでまず、最近専門書の売れゆきが一般に芳しくない、わけでも人文関係図書は、読んだからといってすぐ何かの役に立つというものでは元来ないわけですから、性急な読者の感覚には馴染まない、それだけ敬遠される要素も強いと思われるのですが、書店さんの側からご覧になって、最近刊行される人文書について、どのようにお感じになっておら

れるか、読者の反応はどうか、どういうものに読者は主として関心をもつのか、この辺のところからお話を願ひたいと思います。換平堂の岡田さんいかがですか。

岡田 私は、人文書とは何かというような定義は、余り重要な問題じゃないんじゃないかと思うんです。最近には特にそうなんです、学問的な分野からいえば、それぞれ厳密な分野なり領域なりに分けられるんでしょうが、それがかなり入り組んできて、二つなり三つなりの領域にまたがるもの、或いはその中間のものなど、現実の問題として非常に混り合ってきている。また学問の発達にもなってますます専門分野としては細分化される傾向にあるでしょうが、一般の関心は逆にもっと手軽で解り易いものに向かう、そうした複雑な情況ができてきている。

読者の関心も複雑になってきていますので、書店としてはそうした読者の要請に応えてゆくうえでも、商品分類とか商品展示には従来のような、画一化された分類別の棚表示だけで果してよいのかどうか、分類別の展示ではなくて問題別、テーマ別の展示の方が読者の関心に応えるのに適しているのじゃない

かということもあって、いろいろ研究しているところです。

人文書の場合も、学術専門書と一般教養書という分け方とか、テーマ別・問題別と学術書・一般書とを噛み合せるとかした方が、読者の関心に応えられるのじゃないかと思っています。

それから人文書の売れゆきですが、活字離れとか本離れとか、むずかしいものは敬遠される傾向にあるとか云われていますが、確かにそうした面はあるわけですが、昨年一年の私のところの売れゆきをみると、人文書は必ずしも悪くない。前橋という地方都市ですが、読者の関心は必ずしも低下しているわけではない。参考までに数字を申し上げますと、人文書は前年比で一二・七九％伸びています。社会科学が六・八七％ですから人文書はよいのです。その内訳では歴史が一・〇三％、哲学一・九％、宗教関係も一・九〇％と伸びています。で、私は分野別に観てゆくよりは、むしろ版元別に、どこの社のものが伸びたか、それはどういう理由によるか、というふうに議論した方がより具体的で解りやすいのじゃないかと思うのですが……。

司会 専門書、ことに法経書の場合は地域によって需要に差が出てくる。同一地域でも客層によって、お店の対応によって需要の差が出てくるということがよくあるわけですが、人文書の場合でも学術専門書、一般教養書の別によってやはり需要というか、売上げの上での違いが出てくるわけです。その点、若い学生層の方が多く、専門書の売上げも高い紀伊國屋さんの場合は、いかがですか。

細川 新宿本店の場合で申しますと、人文書のなかには社会学関係の書は入れていないのですが、それでも人文関係は、伸びているといえます。

お客様の層も学生さんを中心とした若い方多いのですが、年配の方、サラリーマンや勉強してらっしゃるお勤めの方も多く、読者の関心も多様ですが、客層にマッチした商品の分類とか展示ということが、人文書の売上げを伸ばすうえでは非常に大事じゃないかと思っております。お客様の選択しやすい分類とお客様の関心に応えられる商品構成ということでしょうか……。

特に最近の傾向としましては、人文書の間でも、いわゆる古典ものは伸び悩みという

情況ですが、一般教養書なかでも最近の若い著者の方たちによる中間的なもの、一般書に近いものはよく売れているといえます。

司会 文鳥堂さんの場合は、それぞれのお店の立地条件によってお客様の情況も違っているとは思いますが、お店全体を通して、人文書の売れゆきとか、読者の関心のある分野とかはいかがですか……。

吉田 まず云いたいのは、人文書というのは商売ですね。版元さんはあれで儲けようなんて思っていないのじゃないかという気がします。それは冗談としても、うちの場合は夜の遅くまで店を開けていますので、サラリーマンの方、婦人客なども多く、三十代、四十代の中堅サラリーマン層が中心ですが、この層の人々がいま一番本を読むのじゃないかという感想をもっています。売れゆきについていえば、換乎堂さんと大体似たようなもので、前年比一二％前後伸びていると云えます。これは一〇年前に比較しますと、棚にして二、三段は増えている勘定になりますから、人文書は悪くないんです。

司会 人文書は、まあ伸びているというお話なので、気を強くしたいところですが、私の

実感としてはどうもそんな気がしないのです……。そこで人文書とはいってもどういう部門のどういうものが伸びているのか、今日の読者はどういう問題に主として関心があるのか、その辺のことをひとつ伺いたいと思うんですが……。

岡田 換乎堂の場合は、先月のデーターがありますので、参考までに申し上げますと、宗教関係が比較的よくて六四冊、心理学が四六冊、社会三一冊、哲学三三冊、教育問題一七、婦人問題九、民俗関係五という数字が出ています。これは勿論、一年のうちの特定の期間のことで、当然季節によって変動するものですし、内容も変わってきますが、大体こういう傾向にあるということは云えるように思いますね。

司会 紀伊國さんの場合は、その点いかがですか。

細川 うちの場合は、宗教関係が比較的よく売れています。昨年でいえば宗教書といっても神秘学といえますか精神世界のものが、若い人にもよく売れています。例えばヨガ関係のもの「瞑想と心」という観点でこのコーナーに入れてありますが動いています。反面、

教育書関係は社会問題として教育問題に関心が高まっている筈なのにどうも動きがよくない。どうしてなのか、その点を検討しているわけですが、新しく教育問題について取りあげてみたいと思っていますところです。

吉田 うちの場合は、店の立地条件にもよりますが、サラリーマン、中・高齢者層が多く、女性客も多いという関係でか、宗教関係はよく、女性問題を扱ったもの、エコロジー関係などの動きが目につきますが、換乎堂さん紀伊國屋さんとは違ってスペースの面で、充分商品が展示できない、そこでどうしてもお客さんの選択の幅が狭くなるということ、いろいろ問題はありますが、或る程度、客層の関心に添って展示商品も焦点を絞らざるを得ない。その辺が一番むずかしいところではないかと思っています。

それから教育問題というのは、校内暴力とかいろいろ社会問題にもなっている一般の関心もあっていい筈なのですが、全く駄目ですね。例外は「積木くずし」だけです。大体、最近の読者には、人文書ばかりじゃありませんが、書名に「学」のつくのは、どうも敬遠されるみたいです。

二 人文書という概念(II)

——編集者の立場から

司会 人文書について、読者の関心の変化とか、商品をどのように展示し、販売につなげるかなどご苦心を重ねておられる書店さんの側のお話を伺いましたので、今度は人文書の作り手と申しますか、版元の編集サイドの目から見た人文書の抱える問題、今後の展望などについて、ご発言を願いたいと思うのですが、筑摩書房の場合は、例えば、「筑摩叢書」など装幀を一新され、若い読者の方たちにもつつき易いようにという工夫を凝らされているようにお見受けしますが、中島さんいかがですか。

中島 人文書の売行きは上向いているという皆さんのお話を伺っていて、心強いことだと思つたのですが、いままでのお話でも出てくるように、人文書とは何かといわれると困るんですね。私どもの場合でも宗教書とか歴史書という分け方はあるんですが、人文書という考え方は企画の段階でもほとんど意識には

上らないですね。私はみずす書房とか創文社などやはり人文書中心の出版社といつていいように思うのですが、おそらく出版社も読者も人文書という枠はあんまり頭にないでしょ。人文書というのは社会科学書とか自然科学書とくらべて漠然としている上に、いまこの領域はいちばん変化がはげしいですね。たとえば、さっきのお話のヨガでも宗教書としてのものもあれば健康法を書いてある本もある。心理の本でも教養もあれば実用書もある。何となく教養とか学問と結びついて考えられていた人文書の領域に、実用的なテーマを扱った本がどんどん入ってきているというのが実情でしょうね。実用と教養の区別がなくなってきたという時代ですね。

司会 そうですね、例えば鈴木健二のものが売れている。今日もここに来る車のなかで週刊朝日を見ていると、「気づばりのすめ」が二三四万部に達しているというのですね。「男は20代に何をなすべきか」というのが七〇万部、これは東大生協で二位の売れゆきであったそうですが、鈴木さんの読者というものは、二十代前後から三十五歳までという。中年以上の読者には何を今さらと鼻白む向きが

あるというのですね。彼のものというのは、ビジネスマン向き、或いは実用書という感じで扱われてきたけれども、それだと三十万部どまりということで、女性層にも読者を拡げるために「氣くばり」は一般教養書としてハードカバーで作ったと、講談社の担当者がいつているわけです。こういうのも人文書ということになるのでしょうか。例えば山口百恵の「蒼い時」なんていうのが、売れたそうですが、編集をやっている女の子に聞きますと、いい本だというのですね、人生の書といったかな、読者の側からすればそんな観方もできるといいます。

吉田 あの本は、私も読みましたが、なかなか中身もしっかりしていると思いましたが、本当に彼女自身が書いたかどうか知りませんが……。

司会 「日本国憲法」の場合でも、中身は憲法ですから法律書に違いないわけですが、あれを法律書として読者は受けるでしょうか、中身は法律でも作り手の側が全く違った視点で別のものを作りあげたというか、違った要素をもったものに仕立てあげたということができるんじゃないでしょうか。そういう意味

で、人文書考えた場合、いろいろ問題があるのではないかと思うのですが……。

吉田 現実には人文書といっても、専門書とか研究書とかではなく、一般書の方に若い読者が関心をもっていることは事実です。それは売れゆきにはつきり出てきていますから……。

司会 岩波書店さんは、アカデミズムを代表する出版活動を続けてこられたわけですが、そのなかでも時代の変化なり著者や読者の変化に対応して、いろいろとご苦心をなさっていると思うので、その辺を含めてひとつ……。

岩崎 今までのお話を伺っておりますと、学問論もしなければならぬし、メディア論も、そして読者論も読書論も論じなければならぬし、本のコストの問題にも言及しなければならぬように、これは今日は大変なことになったと、いささか驚いているところで。

私は岩波書店というところで、編集という仕事を三十年余続いている人間ですが、その経験の上に立つてはつきりと結論から先きにいつてしまいますと、世の中一般の風潮が変わり、ニーズが変化している状況があるからといって、そうした情況に追隨して出版活動をするばかりではいけないと思っていま

す。今日はこれが流行しているかうといつて、それにとびついて、その流行に合わせて本をつくる——それはそれはそれで結構なことであるかも知れませんが、私は断乎としてそうした仕事はしたくないと思っている頑固者なのです。「今は岩波型啓蒙文化の時代ではなくって、文春型趣味的文化の時代だ」などといわれる向きもあるようですが、そうした言葉を私は面白い比喻として「なるほど」と思いますが、だからといって「趣味的文化」の出版活動に変えないといけないとは思えないといふことです。もっとも、この言葉は比喻であつて、それ以上の意味ではありませんが。

そこでひとつ申し上げておきたいのは、例えばプラトンの全集ひとつを考えてみても、これが一万部以上も購入されるというのがこの国の一方の文化状況なのです。こんなことは恐らく世界の中でも極めて珍らしいことなのではないかと思うのです。そして同時に一方において、イギリスやドイツやフランスの書物などをみえていますと、しばしば初版は一八三〇年代、そして何回も改版を重ねて一九八〇年代にも、そのままのものが出されている。文化とか出版とかいふものは、その

時々の風潮というよりも、こうしたゆっくりとした静かな積み重なりなのではないか。そうした仕事をしなくてはと思うのです。

司会 大月書店さんの場合は、大変固い出版活動をされていますが、最近「センチュリーズ」など、そのパンフレットを拝見しても大変意欲的に取り組んでおられるようにお見受けするんですが。

佐保 さき程からのお話のなかで、人文書は伸びているということなので、結構なことだと思っているのですが、実際に書店さんに行ってみますと、圧倒的なスペースをとって展示されている本というのは、私どもの出す本と同じく本であってもかなり異質のもので、事実そうしたものがよく売れているのだろうと思います。それらと比較して人文書、学術専門書が売れた、売れないといってみたところで仕様がないのであって、比較の対象にはならないわけです。たとえばエンターテインメントものとは本質的に性格を異にしています。人文会の会員社のお出しになっている出版物は、もともと多品種少量のものが主流をなすわけですから、そのなかで考えなければならぬ。そうはいっても、確かに、最近

一点当りの売れゆき部数も落ちる傾向にありますので、なんとかしなければならぬと一生懸命やっているわけですが、いわゆる人文書の範囲にかぎってみても、初版二千部レベルのものが売れなかったというのと、五千部なり一万部なりを見込んだものが売れなかったというのでは、やはり本質的に違うと思うのです。だから人文書といわれているものの場合でも、専門書と一般書とは違うというのを考えにいれて議論しなければいけないのじゃないでしょうか……。

司会 どういう読者層に向かって、どのような問題を提起してゆくか、という発想と、何々先生の研究されている論文をどう出してゆくんか、という発想とは、対象とする読者層の想定も異なり、おのずから発行部数も変わってゆく、ということになりますね。

岩崎 今日はマスカルチュアの時代です。それから、やはり赤川次郎さんや松本清張さんのご本と、それから学術専門書の部数とは、単純に比較にならないだけじゃなくて、片方は幾何級数的な広がり、書店の数が増えればそれだけ増える。けれども学術専門書の場合、研究者の数も高度成長で増えています。それ

ど、専門書は書店の数が増えてもそれに比例して増えるものではない、という問題があるのです。

たとえば岩波書店において、そのことを考えてみますと、せいぜい初版部数は、B6判の啓蒙的な本、あるいは一般書というふうなもので、四千部か五千部。

それから、これは学術専門書、と言って、俗にA5判上製で出版するものは、まあ二千か三千部か。日本歴史みたいな、多少研究者層の広いもので三千部。もっとかたい宗教学術書は千五百か二千部で、しかもそれは、三年で売り切ればまあ普及できた、と言わざるを得ない。こうしたことは昔と殆ど変わっていないのです。

吉田 そうですね。この場合には、売れてる本を除外してというか……。

岩崎 人文書の中でも、一般書と専門書とはあると思います。

吉田 内容の問題もありますけれども、領域の区別がつかなくなってきた、それがお互い重なり合っているというのか、どんどん増えてきたので、その辺を少し狙わないと、売り上げも上がらなくなってきたのも事実です。

岩崎 だからといって、千五百か二千部しかつくりださず、うんと高くてもいいのだと、澄まし込んでいいのだと思っているわけではないのです。むしろ私は、とりわけ社の製作部門の連中には、革命的にコストダウンでできる方法が考えられるはずだと、いつもアジっているんです。もしうちでそれが開発できたら、次の日からはよその出版社もそれに倣うだろう、そういうことを考えたら、もうそれだけですばらしいことじゃないかと……。

吉田 広松さんの本だって、もう少し安ければもうちょっと売れたでしょうね。

岩崎 残念ながら昨日まではまだ考えつかないんですが、きょう開発できるかもしれない。つまり一方で、技術的にはそういう可能性に満ちた時代になっているのじゃないでしょうか……。

三 読者の変貌と編集者の対応Ⅰ

——権威主義とコモーションリズム

司会 印刷・製本など造本技術という面から

云えばそれも可能になるであろうと思うのですが、その以前の段階として、例えば岩波書店には「岩波ファン」という非常に厚い層がありますね。みずす書房にはみずすの、また未来社には未来社のファンがあるというように、読者の中にはそれぞれの意識の波調といえますか、出される刊行物やその著者への信頼感というか、期待感と申しますか、マッチするフィードバックがあつて、或る程度計算できる層としての数があるわけですが、そうした伝統なり実績がなく、看板も馴染みも薄い版元の場合、読者に対してどういうふうに分たちの刊行物、或いは刊行物を通しての企業としての訴えをやつてゆくかということが大きな問題となるわけです。新興のそうした版元さんの場合は、深刻にそうした問題と取り組んでおり、法経書の分野でも、人文の分野でも新しい感覚による問題意識を刊行物を通して投げかけてきている。そういう情況がいまあるように思うんです。

活字文化そのものは決して衰退したとも思いませんが、ただ読者の本に対する関心、対応の方はかなり変わってきたのではなからうかと思うんですね。それは、例えば高度成

長期を通過する過程で、日本の社会は急速に産業化社会へと変わっていくわけですけれども、産業化社会というのはあくまでも機能的な、合理的な、あるいは功利的なと言つてもいいかもしれない。そういったメカニカルな組織へと限りなく傾斜してゆくわけですからその中に生活する以上、生活環境の変貌や生活意識の変革ということも当然出てくる、生き方の問題としてもいろいろな態度が出てくる。本に係わることもそういう関係が基本的にあるんじゃないですか。

そこで、では版元の側は、一体そういう読者の変革をどう捉え、どういうふうに対応していくかという問題になると思うんですが、その点はいかがですか。

中島 難しいところですね。僕らの社は文学全集にしろ、日本に根強い権威主義に依存しながら商売させてもらつてまいりました。いまそういうものは確かに崩れつつあると思いますね。しかし崩れてくることは必ずしも悪いことばかりじゃないと思います。もともと本の値打ちというのは、その作品自体がもっている価値から出てくるという面と、もう一つ、読者がその中から発見してく

るものによってつくられる面とがあるわけですね。特に一般に人文書といわれるものは、きつちりとした体系なり理論なりに支えられるのでなくて、読者の関心によって価値がつけられたり動いていく面が大きいでしょう。

糸井重里さんという流行のコピーライターに「ヘンタイよいこ新聞」というのがありますね。これは読んでみて非常に面白かったですよ。こういう本の意味というのをどう考えるか。優等生がおちこぼれかという区切り方に対して、そのどっちでもなくてたくさんいるタイプとして「ヘンタイよいこ」というのが出されるんですね。「セイジョーよいこ」「セイジョーわるいこ」に対して「ヘンタイよいこ」。価値観や生き方の多様性を認めると、良い子、悪い子だけじゃなくて、こういう子を登場させる必要があるというわけです。この子は、自分にも他人にも自信を持ち切れなくて、うたがいの心をもっている。だから他人にも寛容なんです。鶴見俊輔さんなんか戦前昭和の典型的な「ヘンタイよいこ」でしょう。戦後はみんな「オ花ヲカザルみんなよいこ」になっちゃって、中野重治さんが言った平べったい民主主義になった。民主主義

に活力がなくなってくる。いままでだと、上から原理的なものとか教養のかたちになっているものを注油して、活力を取りもどそうとしたけれどもうまくいかなかった。権威主義として硬直しちゃった。その本自体に値打ちがあつて、それを読みさえすれば、本から価値が流れ出てくる、有難いものだ、文字通りお経みたいになつてしまつて……。

糸井重里とかビートたけしとかいう人たちのやっていることは、中野重治さんのいう平べったい民主主義を下からつき崩そうというところをもっていると思うんです。ビートたけしの漫才なんか、いちばん弱い人の足をまたその下からひっぱっているみたいだけれども、必ずしもそうじゃない。かわいそうだけれどもおかしいとか、おかしいけれどもかわいそうだとか、そういうところがありますね。「セイジョウよいこ」に向つての画一に対する解毒剤になっていると思うんです。しかし、そのビートたけし氏が、近ごろの若者は文字通り残酷で愛情がないと嘆いたりしていて、そのへんは複雑なわけですが……。

こういう問題を編集者の問題に置きかえて考えるかどうか、と言いますと、ぼくは

いま人文書の方がなかなか見えない時代だといわれますが、かえっていま編集者であることが一番面白い時代なんじゃないかと思うんです。つまり、ある時期までみたくに筆者なり作品なりの権威に依拠してやっていたことはむずかしくなっている。しかし、否応なしに読者の関心とじかに向き合わざるをえない状況の中にあるんじゃないでしょうか。

いままでだと——とくに人文書なんかでは——編集者がある筆者を獲得すると、おのずから読者も獲得される、つまり読者というものはある筆者の読者であつた。編集者は読者と同じきあう面が非常に小さかつたんじゃないかと思うんです。しかし、読者の問題関心が非常に動いてくる時代では、編集者がいてその前に筆者があり、その向うのいわば筆者の影のところに読者がいるという構図から、筆者と読者の間に編集者がいて、読者の関心を組織し、それによって選ばれた筆者を媒介してゆく時代になっていると思います。これは雑誌なんかではいままでだつてそうだったわけですが、単行本なんかについてもそうなつてきて、職業としての編集という仕事の独立性は強くなつてきているんじゃないでしょうか。

か。編集者は、筆者とは独立した自分のテーマをもつことが必要になってきているとか……、さっきの山口百恵さんの「蒼い時」とか「窓際のトットちゃん」でも「日本国憲法」でも、仕掛人としての編集者がくっきり浮び上ってきているわけですね。こういうところはこれからも続くんじゃないでしょう

か。仏教書とか心理の本にしても、固定した価値の体系があつて、そこから流れ出てくるものをすくい取って読者に提供するのではなくて、編集者が読者の関心をみつめながらそれをどう読みかえて可能性をひき出してゆくかが問われている時代のように思います。百鬼夜行というところもあるわけですが、それこそルネッサンスの人文主義精神というか、生きた人間の関心にもう一度基礎をおいたところで人文書というのを考え直していきたいですね。女の問題でも教育でも、いままでの方法ではとらえ切れない時代だと思うわけです。

司会 そうですね。編集者がいま一番面白い時代だというのは解りますね、もともと編集者というのは学者じゃないわけですから、世の中の動きには敏感に反応し、或る種の先見

性をもつて問題を提起する役割りで、間口こそ広いかもしれないが底は浅い。しかし、そうした問題意識を専門分野のなかで研究されている筆者にぶつけてゆき、彼らの執筆への意欲をかきたてて刊行物にしてゆく、そのことによって筆者もまた育つてゆく。そういうことをするのが本来の編集者の仕事だということに教わってきたわけですが、さて……。

そういう意味で、編集者、つくり手というのは、常に自分の問題意識がどこを向いているかということになるわけですが、現実には動いている社会、そして自分たちが日々生活している社会がどうあつてほしいか、或いはそういう社会にどう対応するのかという意識が編集という仕事の支えなんじゃないでしょうか……。

四 読者の変貌と編集者の対応Ⅱ

——情報としての読書と読書指導

岩崎 最初に申しましたように、今日の座談会はやりにくいなと思つたのは、学問論とかメディア論とか、あらゆることを論じなくて

はならないからです。読者の変化を論じる場合でも、人文書とのかかわりを意識して論じるのですから、読者の変化を語る前に、学問研究の変化とか状況の問題にしなくてはならないことになる。

今、中島さんがおっしゃった権威主義云々は、平たくいえば、一九世紀に確立したヨーロッパの学問の形態や方法と云つていいでしょう。そしてそれを日本の近代においては、帝国大学を中心にして模倣する形で日本なりに確立していったわけでしょう。そして、岩波書店の出版活動なども、そうしたことといふような意味でかかわり合つてきたと思います。

その「権威主義」が今日それだけでは間尺に合わなくなってきたのですね。それだからこそ学問的だとかいうようなことが出てきているわけです。そして合わせて、「権威主義」が失われてくる土壌には、やはり客観的な時代ではなくて主観的な時代になって、つまり反動的な時代になっているということも重なつて出てくるわけです。そしてもうひとつは、サイエンスの方法そのものが今日では非常に計量的、工学的になってきて、それが人

文科学の方にも及んできているわけですね。

そうした状況の中で、一九世紀にヨーロッパで確立した学問の方法なり態度なりを比較の牢固に守っているようにみえる側について、権威主義だ、もう古いという声や批判があがっている。もう片一方で、非常に学際的な新しい方法だといってやっておられる側について、「牢固に守っている」方は、ああいっただけの学問ではない、ただ思いつきをみんなで寄り集まってやっているだけではないかと見ている向きもあるわけです。例えばそれは、近年、岩波書店で出した「文化の現在」というシリーズがありますでしょう。こういったものに対して、一方では新しさを感じる方があり、もう一方では、「何だ、あれは……」というふうに見る方もあるわけですね。

ですから、もちろん、今さら十九世紀のヨーロッパに戻るわけはないのですが、だからといって、新しくそっちの方がいい、そっちがいいといって、そっちだけの出版活動ばかりをやっていくわけにはいかないのですね。そういうわけですから、こうした状況はまた、編集者にとっては面白い新たな状況なのです。

つぎは読者についての問題ですが、私は昨年、大学生協の書籍部の店長さんたちの集まりにまねかれ、そしてその前に、東大、早稲田、慶応の生協のお店を一日かかって見学させていただいたことがあります。これは、大変勉強になりました。たとえば経済書についてですが、今日の大学ではマルクス経済学というのは、いまや会計学だとか財政学だとかいう経済学の一分野のひとつくらいに存在になっているのですね。せいぜい棚三段で間に合いますよと、東大でも慶応でもそういっていました。ずい分変わりましたよって。

それから、今の学生はずいぶん幼稚になったとしきりにいわれ、私もそうだと思っていました。三十二、三の店長さんから、逆の見方を教わりました。店長さんがおっしゃるには、「僕らが学生の頃には『記号論』みたいなものは難かしくてとても読めなかったのに、今の学生さんたちは、どんどんこういう本を読む。今の人たちが、ませて進んでいますよ」と。こういった見方が絶えず必要なのだと、これは教えられました。

もうひとつと読者の問題についていますと、現代のような情報化社会では、本を丸ごと

と読まないで、情報としてある部分、部分だけを読むようになり、全体像を捉えることが出来にくくなっています。そしてとりわけ若い人々全般に、高学歴にはなっていないでも読書習慣を身につけにくくなっている。ですから、近頃では中学や高校でもあらためて「読書指導」ということがいわれ出し、それだけでなく近年は全国各地の大学においても「読書指導」というようなことがいわれています。このような若い世代の状況について、「活字離れ」とか「偏差値受験体制のせい」とか「〇×教育の行き過ぎ」とか、いろいろいわれています。どれもウソではない原因のひとつでしょうけれど、私は現代社会そのものがつくり出した複合的な陥穽みたいなものだと思います。編集者としては、そういう状況について、勿論絶えず注目し、情報取得的読書の時代に本を出すためには、その状況を嘆くばかりが能ではない、いろいろその状況を研究し、新たな要素を取り入れて、本をつくる必要があるのです。

情報取得的に本を見る読み方と、丸ごと本と正対して読む読み方とは決定的に違います。それがいいとか悪いとかいうことよりも、

編集者是否応なしに、そういうことについて大いに勉強しなければならぬと思うのです。

佐保 権威とか著者に依拠して仕事をするんじゃないくて、別の時代になってきたというのはその通りですね。出版にかぎらず、生産主導の時代から流通主導というか、かなり流通のファクターが重視される時代になってきていると思うのです。

誇張して云うわけですが、生産主導というか、編集でとにかくいいものを提供すればそれなりに売れるんだ、と言った時代から、それだけじゃ間に合わないというのが明らかになってきている。

そこでわれわれ編集者が、著者からどういうものを引き出していくかというより、なにを著者に要求していくかという意味で、——編集者がいまおもしろい時代だという話が出ましたけれども——私もたいへんおもしろい条件の時代だと理解しているんです。

そこで、いまだこういうことを考えながら仕事をしているかといいますと、マクロ的思考なものとはあんまり好まれないで、ミクロ的思考なものが好まれるという傾向の問題があり

ます。ビジネスマンなどに聞きますと、やはり学者・先生・理論というものより、実際にすぐ役に立ちそうなもの、そういう意味でミクロ的なものの方がいいですというような話があるわけですね。

一方学問の世界もどんどん細分化してきている。その結果、ちようど医療の世界で臓器別に専門化するあまり、人間全体の姿が見えにくくなっていることと似たようなことが起こっています。

さっき専門書と一般書というのは、人文書の中でもかなり区別して考えなくちゃいけないというふうに思っていると言ったのは、そういうことも多少関係あるんです。マクロ的なものとミクロ的なものをいかにつなぐかということ、それからあと、学問の世界と現実世界ということがありますね。

やはり学問の世界には学問の世界の独自の発展法則というか、運動法則というか、その論理があって、それに従って本を出すということもひとつあるわけですね。

同時に、先ほどから出ている学際的だとか何とかっていうのが必要とされるような状況というのは、やはり現実が提起している問題

で、いままでの学問体系だけじゃカバーしきれない。これをいかに引き出して、学問の世界とつないでいくか——現場と学問といいますが、それをつないでいくことが、いまの時期にもうひとつ大事だと思うんです。

具体的に、大月の場合、そういうつもりでやっている本としまして、『最前線シリーズ』と社内では呼んでいるんですけども、たとえば気象庁の労働者が自分たちの仕事を分析した「気象最前線」という本を出しました。それは他に航空問題であるとか、幾つか出しています。そういう、現場から問題を拾って、それを学問なり理論なり思想なり政治の世界と結び付けていくということ、これは大変おもしろいところがある作業です。

マクロとミクロ、理論と現場、生産と流通、それからうちの中でも編集と営業は、やはりお互いに相補なってやっていくということとで、いろいろ努力しますね。編集部の方、書店の方や生協の方に来ていただいたり、勉強会やったり、あと営業の人が出てくるとかね。ですから、今度マルクス百年で出した「大月センチュリーズ」というのも、編集だけじゃできなかった企画なんです。営業

部方面から、ああいう企画をやらないかというのが出てきて、編集・販売・宣伝・製作の四部門共同で企画をねりあげました。

社内ではそういう編集と営業という形になりますけれども、出版界全体では、やはりこういう書店さんと版元との話し合い——相互交流というのは大事だなというふうに考えているわけです。

五 出版のもつ「ワク」と壁

——社の主張と読者ニーズについて

司会 先ほど中島さんがおっしゃったように、編集者は、うちの場合でもそうですし、岩波さんもそうではないかと推察するのですが、どっちかというと、読者の側より著者の側に顔を向けている。ところが、大衆的な出版物をおつくりになっている、つまり商品をお作りになっている出版社さんは、受け手の側といえますか、読者の方に顔を向けていらっしゃる。その辺で、編集者の対応の仕方は全く違っていると思うんです。

自分達の作った本を読んでもらうというた

めには、もうちょっと読者の側に顔を向けなければならぬのではないかと、というようなことを、最近は専門書の版元さんでもかなり言われてきているのではないかと思うんです。そこで、受け手の側に受け取られやすいような状況をどうしたらつくれるかということなのですが、その点どうでしょう。

中島 もう十年ぐらい前でしょいか、東大の生協で井上富雄さんの「ライフワークの見つけ方」という本がベストセラーの二位だから三位だかに入ったことがありましたね。僕には大変ショックに感じました。それまで何となく学生の読む本が社会人に知的なインパクトを与えていく源泉みたいに思っているところがやはりあったのですね。それが二十かそこらでライフ・ワークの見つけ方という本を一生懸命読むというのがどうにもわからない。だって、定年迎えた人ならともかく学生がこんなテーマの実用書読むなんてどっかこっけいですよ。しかし、一面、学生を教養的な本の読者として漠然と考えていたことに大変反省させられたわけです。つまり、これは自分にとって読者が見えなくなってしまうことだと考えざるをえない。これはこういうい

い本なんだからこれぐらいの読者はいるはずだと、何となしの良い本を何となく出してきただのではないかと、ということですが。いまために読者の関心が多様化し、かつ中心になる權威からうすれている時代だと、いまこの本をなぜ出すか、どの読者に向けて出すかということをはっきりさせておかないと失敗することが多いですね。「ちくまぶっくす」や「ちくまセミナー」のようにアップ・トウ・ディトな問題を扱っているシリーズはもちろんですが、「筑摩叢書」のようにセミ・クラシックを入れているシリーズでも、このクラシックをいまの読者はどういう関心で読むだろうかをよく検討しておかないと失敗する。こういうことは、もちろん大部数の雑誌の編集者にとっても当然のこととしてやられてきたことですが、どうも雑誌だけでなくこういう編集センスが要求される時代ですね。私の社のように大雑誌もないし毎年いわば必ず需要が発生する辞典も文庫ももってないで、かつある規模をもっている出版社にとって、変化しつつある読者の関心をどう組織しうる本を出すかは死活問題ですね。

といって、あっちの水は甘いぞというので



あちこち渡り歩くわけにいかない。人文書ということばを使えば、そういうものの出版には、出版の仕事というのはメンのタネだと割り切ることのできない価値があるんだということが、社員の共通の了解になっているところがあるわけですね。筑摩の場合でいえば、創業者の古田さんはそれをお前たちは自分の本当に惚れ込んだ筆者をもて、その人のものを出せという言い方でそれを言っていたんです。そういう理想主義みたいなものは採算を度外視するという部分がどうしても出てきますから、これに対しては、いわば企業として自衛力が必要なんです。債務を抱えた更生会社ですから、出したいものを出して盛大にメンも食うというわけにはとうてい参らないわけです。ある種の個人全集なんかは採算上苦しくても出していかなくてはならない、蓄積された文化的な価値を正しく整理された形で伝えるというのは大事な仕事なわけですね。そして、これが可能であるためにも、もう一方では変化しつつある新しい読者を獲得するために新しい目で企画の方向を広げていなくてはならない。そういう二極構造が必要になつてきているというか、出版社の型、

規模、方向について新しい哲学というか、理念が要求されているように感じています。

司会 例えば法経書主体のうちでも、学術専門書、専門雑誌だけでは売り上げの伸びはそうそう期待できない、そこで六十人の社員の生活を維持するためには或る程度部数の見込めるものをと考える、そこで法経以外の分野で部数の期待できるものをもっとも、それは他社さんがそれぞれすでに必死になって開拓されてきた分野ですから、後発組としては余程優れたものでない限り虻蜂取らずになるばかりか、ひとつの間違えれば社のイメージダウンにさえなりかねない。本来、社が主流として誇りをもつて世に贈ってきた出版物をどの様な悪条件のなかでも刊行し続けてゆくために、稼ぐ部門を別に設けて本業部門を守るのだという発想は、どこでもやることだと思ふのですが、これは理屈じゃそうですが、実際はむずかしいですね。

うちの人文書についていえば、法経を中心とした社会科学分野の専門書の読者を対象とした周辺の教養部門ということになり、部数もそこそこという域を出ないというのが実態です。



中島 そこはたしかにむずかしいところでですね。どの社にも創業の理想と伝統の蓄積がありますね。たとえば同じ文学ということばで考えていても、筑摩と新潮社や文芸春秋とでは中身がちがいますね。おそらく新潮社や文芸春秋に対して筑摩の場合は同じ文学といっている。だから文学全集をやると柳田国男さんやら中江兆民やらも入ってくる。唐木順三さんなんかも文学者のイメージですね。

また、よく出版は水ものなんて言われますが、一点一点の部数なんかにはあてはまると思いますが、岩波文化とか講談社文化とかいう言葉のように、社の性格は非常に変わらないのです。編集者は何世代も変って、「おれはこの社をもっと新しくしてやろう」なんていう人がうんと出ても、やっぱり一貫した性格がつづく。編集者の創意よりは、選択されて定期的に執筆する筆者とその読者層の枠みみたいなものがやはり強いですね。これは非常に貴重なところで、それぞれ大小の出版社が固有の存在理由をもつところだと思いますが、その中で編集者の意識まで保守的になつてしまふのは困りますね。

岩崎 おっしゃるとおりですが、ただその枠をもっと大きくしよう。変えようということ、内部で絶えず行なわれているのです。ただ、それが外部の方が見て、外側にまではつきりわかるようになったら、それは大革命ですよ。

岡田 私も含めて四十代ばかりで、もう一線からはずれているんですが、今日の「人文書とは何か」とか、「人文書の読者はどういふふうに移ってきたか」というような大きなテーマは、やはり四十過ぎの人たちが集まっても、いまま言ったような二極論ぐらいしか考えられない。

ところが、本当に変化しているのを受けとめているのかどうか、そこを論議するのがきょうのテーマじゃないかと思っただんです。

それで、実はもっと一線の若い編集者が来た方がおもしろかっただらうなあと、ひそかに思っていたんです。私も部長クラスが来るんじゃないくて、現場の担当者が入って、いま本当に人文書というのはどういふ扱い方をしているのか、哲学とか宗教というのはどう考えているのか、ということ論議した方がおもしろかっただらうなと……。

私、去年一番大きな問題として、核問題とベトナム問題を取り上げてたんです。まず核の本の大きなコーナーをつくったり、被爆者と群馬大学の学長さんと呼んで対談をしても良かったり、それでかなり出たんですよ。

その次はベトナム問題で、ベトナムはもう終わったと言ってるけれども、枯葉作戦の後遺症とか、それはわれわれが使っている防衛剤なんかにありますよというので、消費者運動がありましたね。それに焦点を当てまして、岡村昭彦氏をお呼びして、枯葉作戦の映画と講演をしても良かったのです。

そうやってアジッタあと、僕がふと「写楽」を見たら、「写楽」の編集者があの裸の中に、ベトナム枯葉作戦の特集をやっているんです。僕はびっくりしましてね。ああ、この目だな、この目は私たちにはないな、と思ったのです。おそらく、いまの二十代、三十代の人の目だろうな。何となくそういう裸の中——日常のごくありふれた中に、ぼつとああいうものを同じレベルで入れる。同じレベルといってもそれを消化してるかどうかかわかりませんよ。けれど、これは私たちはかなわらないあと感じたんです。

それから話は飛びますが、今年大学に入っただうちの娘に友達の話なんか聞きますと、ほとんど本読まないよというんですね。優秀な人いっぱいいるけれど、漱石なんて読んだことない、教科書に出てくる本だけ、あるいは点を取るための勉強しかないんですよ。

それで、この間の統計で、一ヵ月間の書籍代が五千円以下になったっていうんですが、中身を見ると、まず漫画と文庫本しか買っていない。専門書はわずかだ。つまり専門書を買ってるのはほとんど四十代以上ですね。そりゃあその下の人たちでも、勉強を進んでやろうという人はいるでしょうが、ただそういうままにしておくのか、あるいは、その間のギャップを埋めるものを人文会にいる人たちが努力していくのか、その辺の編集者の本音を少し聞きたいなと思うんです。

六 新しい読者層の獲得へ

——書店の要望と編集者の視点

司会 だんだん話が核心に入っていくようですが、先ほどちょっと話に出てましたよう



に、哲学、宗教関係の本が売れているということですが、この読者層というのは、おそらくかなり高齢者層ではないかと思うわけです。産業化社会の構造が一段と整理されますと、一方では高齢者が構造からはみ出さざるを得なくなり、高齢者問題がこころで起ころ。また一方では偏差値による区分けが子供の教育問題として次第に社会問題化する。つまりここでも水準からはみ出した者が行き場失って校内暴力問題などを惹き起してゆく、そしてその親たちは産業化社会の中ではみ出しまいと必死にさがっている。これはそれぞれ別箇の問題ではなく同一基盤の上の問題であり、戦後のアメリカ型の物質文化を追及してきた必然の結果が様々な型でいま顕在化しつつあるのじゃないかと思うんですね。

そこで宗教とか精神世界とかいう関係の本が所詮は関心を集めることになるのじゃないかと思われのですが、これも現実問題にまともに取り組んで、その中でそれぞれ内面的な問題をつきつめようというのではなく、手取り早く解るようなものを与えられることを期待しているように思われる。情報産業がそれをいち早く見越して次ぎ次ぎに与えてゆ

く、ということになるわけですが、これでいいかどうか、私はちょっと疑問に思うんですね。読者の方はますますそういう要求を強めることになるでしょうし、版元はそのことに没頭してゆく。紀伊國屋さんの場合、読者というか、お客さんと毎日接しておられて、その辺のところをどうご覧になりますか。

細川 うちの場合は、専門書を買う客層というのはありますけれども、限られているというのが現状ですね。ですからそれから一ランク下がった部門の教養書になってしまうのだらうと思いますけれど、それがいま無限というか、その読者の開拓が一番大切なんです。

一つの分野の中で売れているテーマというのは、一年ぐらいで変わっていつてしまうわけです。ですからテーマと、やはり定価の問題があるわけです。専門書を買うお客様というのは値段に関係なく買いますから、それは別だと思えますけれど、その一つ下のランクの教養書の客層は無限にいらしても、やはりテーマなり定価が自分の欲する内容と一致しないと、購買意欲につながらない。ですから、そういうものを、われわれとしてはつくる側にお願ひしたいと思うんですね。



岩崎 いまの「そういうもの」というのを、もう一度説明していただけないか。

細川 たえば宗教の分野の中で、去年は非常に精神世界が売れた、ヨガ関係が売れた、だから一年たってまだそれが続くかというところ、もうそういうものはなくなっているわけですね。で、こしはというと、神秘主義が売れる、魔法関係が売れるというふうに、その一つの分野の中に売れるテーマが違ってくるわけなんです。ですから、その読者層に合ったテーマを早く捉えて、つくっていただきたいと思うのです。

それから、先ほどおっしゃったように、いま情報化時代で、情報を得るために読むというものが非常に多いのではないかと思います。だから次から次へと新しい情報を早く身につけていかないと、仕事の上でも、仲間との対話でも、追いついてはゆけないのです。つまり、安くて、テーマが難しくて内容がわかりやすく書いてあるもの、そういうものをまぜ開拓していかないと、読者増につながらないのではないかと思いますね。

それから、人文会の版元さんというのは非常に歴史のある版元さんが多いですけど、

新しい版元さんもういぶん出てきてると思うのです。そのアウトローの版元さんが人文書の世界にだんだん入ってきて、その占めるシェアがすごく広がってきております。

そういう人たちがなぜそのように乗ってきてるかといいますと、先ほどもお話がありましたように、非常に編集に当たってる方が若いんです。そういう方たちが新しいブームをつくっていったところが、非常にあると思うのです。ですからやはり、若い編集者の出現というのが必要じゃないかと思っています。

司会 吉田さん、いかがですか。

吉田 うちの場合、読者層というのは昔から変わらないんですが、三十代、四十代が主なんです。それで、岡田さんのおっしゃることよくわかるですが、吉本隆明を読みながら平凡パンチを買いお客様というのは、うちの場合ですと十二、三年前からありました。ですから、「写真」にヌード写真とベトナム戦争の、あるいは今度のアッサムの虐殺の写真が載っても、うちの若い連中は別に不思議じゃないと、そういう傾向があったので、出版というのとは本来そういうものだと思ってます。それから精神論とか人生論という問題です

けれど、こういうのは、やはり亀井勝一郎さんの時代は時代でヒットしたわけですから、いまは椎名誠であるとか、わかりやすく砕いた若い連中の書くものが代替しているわけなんです。ですからいま、亀井勝一郎の人生論なんて出しても、多分売れないでしょうね。

岡田 いや、亀井勝一郎みたいのを出せというんじゃなくて、いまは椎名誠が代行しているとしても、当時の亀井勝一郎みたいな売れ方はないわけでしょう。

吉田 椎名誠もどきのものが分散しているの、発行部数としては、亀井さんのよりはるかに売れていますよ。

ただ「プラトン全集」とか、相当売れているらしいですね、買っていく人が「不思議だなあ」って言ってますよ。その人がそれを読んでいるかという、いや、息子とか娘が将来読むかもしれないので、という人が多いんですが、やはり一種の権威に対する郷愁みたいなものが残っている。それが、さっき岡田さんがおっしゃった五十代ぐらいの方だと思います。

新しい読者を捉えるというのはなかなか難しいわけですが、編集者も街へ出て本屋へ入

る時は、一読者としての目があるはずなので、その辺のところから当面の問題を考えていただきたいと思うんですが……。

中島 編集者も一読者であるという点からいえば、五十近くになって、こんどのあの雑誌の新人賞は結構でしたとか、「ヘンタイよいこ」ってとてもおもしろいなんていうのは、それこそヘンタイみたいなところがあって無理するわけですよ。ある世代より上の人文書の編集者というのは、読者であることと編集者であることが一致しえた幸福な時期をもったんじゃないかと思っています。しかし、いまのように変化のばげしい時代にあつては、編集者の眼は否応なく読者としての自分からも筆者からも独立した編集者の目をもつことが必要になってくると思いますね。椎名誠を読んで共感する目じゃなくて、読まれる状況を理解する目というのは、限界はあるにしても、年齢をこえることはできるんじゃないですか。別に編集者だけでなくて、それぞれ、どんな職業でも似たような、生活する人間とは別の目が必要なのではないですか。ただ……、もちろん編集者の場合は、その仕事への自発的な意欲と最低限の筆者への共感が必要ですが……。

岩崎 私は『クロワッサン』の編集などを時々みて、なかなかお上手だと思って、よくわが社でもあいつたセンスを学ばなければいけないと、しょっちゅう言っているのです。

現在、岩波書店のような「老舗」には、おそらく筑摩書房でもそうではないかと思いますが、二十代の編集者などという貴重品は、まずいないのではないかと。そんなような人的構造になっていますので、逆な云い方になりますが、私みたいな五十代半ばの人間が、仕事としてやっていることは三十代半ばのようなことをやっているのですよ。そういう意味ではちっとも年を取っていないのです。

それから、一時代前までは、平均寿命が四十五、六才、今では七十五とか八十才とかいうように、わずかに四半世紀の間に変化しました。一時代前の昔は、ですから五十才以上はもう老人で、老人の読書というのはお経が盆栽の本ぐらいだったでしょう。ところが今は、そうではありません。六十代、七十代の高齢者の読書は、今日では商売としてみても無視出来ない巨大な市場ではないですか。

たとえば、岩波文庫の中から、老眼の人にも読めるようにしようじゃないかと、字を大

きくして「岩波クラシックス」などというシリーズをこしらえたのですが、お蔭様でそれなりに成り立つわけです。こういうった社会の変化とそれへの対応というのは、普段から社の内部でカンカンガクガクやっていないと生まれてこないのですよ。そうした開発とか企画というか、そのファイトは、若い人の必死さとちっとも変わりがないのです。

それから、「岩波ジュニア新書」とか、「岩波ブックスレット」とか「二十世紀思想家文庫」とか「古典を読む」等々、いろいろと社内では次々と新しい仕事を打ち出す意欲があり、それがこんな形で出版活動にあらわれているわけです。ただ、岩波のような老舗の現在の人的構造では、そうした仕事を打ち出すのは、相当の年輩、経験者の層になっているという不幸（あるいは幸い）が在るのです。

だから、私のようなものが、いつまでも年をとらないという幸いと不幸が、この社の問題としてあるなあ、いつも思っています。

吉田 若い人、いないんですか。

岩崎 そりゃ、三十代、四十代は、スタッフに大勢いますけどね。あの老舗の中で仕事のバイオニアというふうになるというのは、な

かなか容易じゃないんです。そういう問題があります。

七 講演会活動をめぐって

——読者と筆者との架橋づくり

岡田 全く私も同じような立場なんです、実は人文書のフェアを六月か七月に企画しています、そのプロジェクトチームをつくらせたんです。外商部と店売部とそれから楽器部にも早稲田の哲学科の大学院出たのが二人いるんですが、そういうのをチームに入れたんです。

換乎堂という店が全盛の時は、前橋で書店は四軒しかなかった。いまは四十六軒ある。東京からもテナントの出店などたくさん来

ますし、月に一軒ぐらいずつ、ちっちゃな店が開店するというひどい状況です。そういう中で、換乎堂が換乎堂らしい仕事をするとなると、まず人文書というわけです。それでそういうこと企画したんですが、なかなか意見が出てこないんですよ。何やるんですか、人文書ってどういのですか、となるわけで

す。お前たちしっかり考えてくれと言うと、外商部なんか「売れっこないですよ」って言うんですね。

君たちは駄目だって言うけれども、じゃあ君たちが読みたい本は何だ、といって二十社の目録、全部取り寄せたんです。そしてそれにマークをつけて、そこからイメージをつかもうじゃないか、「人文書フェア」とか「現代の挑戦」とか、タイトルはいろいろあるけど、全部自分たちで考えてこい、と言ってあるんです。

この前、全国の書店の催し一覧表見ましたけど、各店で、おそらくひと月かふた月に一遍ぐらいやってますね。何とまあ類型的だというか、たとえば鈴木健二とか自然保護だとか、パターンが決まってる。手づくりがあるまりないですね。人文書売るといえるのはそういう意味で、担当者とその店の店長クラスの認識——その人たちにクリエイティブなものができなきゃ駄目じゃないかと思うんです。

たとえば、この間『エントロピーの法則』という本をごま書房が出したでしょう。読んでみたら非常におもしろいんで、いろんな先

生が店に来るたびに話すと、みんな買ってくれるんです。ある小学校の校長先生にも仕掛けたら、買っていった読んでくれたんですね。それを校長会で話したのだから、四十人買ってくれたんです。各校長さんはまた、学校で読め、読めて言ってくれたわけです。そういうふうに口コミと、担当者がこういうものを熟知することですね。

それから、人文書を扱ってる版元の担当者は店にこないでしょう。文芸春秋とか新潮とか実用書出版の方は、毎月一回はちゃんと来て、担当者とのコミュニケーションをちゃんと図ってるわけです。うちのこういう本はこうだとか突っ込んだ説明をするんです。きのうも講談社のデスクの説明会があったんですけど、若い連中がみんな乗ってくるんですね。「こりゃ、一人で百ぐらいいけますよ」ってね。そういうアプローチが非常に弱くて、いい本を教えていない。ただカタログを送りつけてくるだけ——それも失礼な言い方をすれば、どこにでもあるようなカタログですよ。

僕が前に一番感心したのは、みすずの「ロマン・ロラン全集」のカタログでしたか、明治時代の藤村あたりから、ロマン・ロランの

ジャン・クリストフをどう読んだとか、みんな短文ですがバツと載ってるんです。そうすると読みたくなるんですよ。『ジャン・クリストフ』だけじゃなくて、『魅せられた魂』について花袋はこういうふうに言ったとか、藤村はこうみるととか……。非常に興味が湧いてくる。そういうカタログをつくるといいと思うんです。

それから、うちで毎月文芸講座みたいなものをつくってるんです。単なる講演会というのをやめて、あえて「講座」と区別したのは、作家と出版社に、地方の読者というのとはどんな顔しているかというのを見てもらいたいということ。もう一つは読み手の方からみると、作家っていうのは偉そうなこと言ってるけど、肉声はどんなふうでどんな顔してるのか見せてほしいと。それから、いま書いていて一番悩んでいる問題を直にぶつけてほしい。また、その著者はいまこの本が売れているけれど、どのくらい過去に出してどういう経歴があるのか、そういうことをちゃんと紹介しようじゃないか、ということなんです。

そういうことに対して、書店にもう少しくアップしてほしいですね。たとえば著者

を連れてくるとか……、著者だって自分の本が売れるの、いいわけでしょう。ところが、出版社というのは妙な遠慮していて、僕がそう言っていると、「著者をあんまり引っ張り出して、うちで本がもらえなくなると困る。だから岡田さん、直にやってくれ」そういう言い方が多いんです。それで私、直に呼んだんですよ。大体来てくれますね。

吉田 みすずで、学者がことし読んだ中で、というのやっていますね。一位から三位まで挙げていて、なかなかおもしろかったんですけど、専門の人は専門のものしか挙げなくて、実際うちにもあるなという本が極めて少なかったですね。

あれだけの調査をやられて回答があるんですから、もう少し商売に生かせないかと思うんですが。もっと一覽表にしちゃうとか、ランキングつけちゃうとか、もうちょっとわかりやすくやれば、いま岡田さんがおっしゃったように、読者を開発できると思うんです。

それから担当者の問題は全くそのとおりで、だから、出来るだけ本を読めと言っているんですが。そうすると、店に入ってくる方に話しかけられますから、それで大分売れま

すね。ロコミというのは、本屋の場合は馬鹿にできません。

佐保 うちが割合、講演会なんかはやってるんですけど、去年出した『講座今日の日本資本主義』の刊行でも、ずっと東北から北九州まで、書店さんと組んだりして全部で延べ二、三十箇所やったと思います。最後はうちの単独の主催で、山手教会でシンポジウムをやりました。人が集まってくれるかどうかでことで、悩んだんですが、結局やってみて、大体いっぱいになったんですけど。確かに直に読者に触れるという機会は、こういう時代ですから、もっともっと増やしていかなくちやいかんというふうに思いますね。著者にとっても、どういう人が来てくれて、どんな質問が出たとか、読者の水準を知る上でいい機会になりますね。

私自身もよそでやってる講演会なんかにもわりあいよく行ってみるのですけど、そこでの共通の問題は、やはり若い人は難しいなということですね。大月書店自身も二十代の編集者というのはいないんです。

ただ若い人の活字離れたとか、読書離れたとか言われた現象は、突き詰めていった場合

には、やはり若い人だけの個有の問題というふうに片づけることのできない問題だと思うんです。本としては、若者向けの本とかそういう形を意識してつくらなくちやいけないと思うんですけれど、考え方としては、これは若い人の問題だ、あるいは自分たちがそのフーリングにどうやってついていくかという問題だけじゃなくて、共通する問題があると思うんです。

それから、人文書っていうのは商売ですか、というような話がありましたけれど、もちろん商売なんですが、出版の場合、読者のニーズそのものを、変えていくという俤うなこと言うようですけれども、著者なり版元なりが何らかの主張をもち、社としてのアイデンティティーを保って活動していかなくちやいけないと思うんですね。何千社もある出版社がみんなそれぞれ違った個性を持って、その個性が少しずつ発展していく——あんまり革命的に変わることではできないけれど——たえずニーズと作る側にある矛盾をはらみながら発展する。そこにまた、悩みもあるというわけですね。

中島 たしかに変わり方は早いんですね。しかし

人文書というのは、自然科学の体系やら技術がガラッと変ってしまうのとくらべると、いずれにせよ人間の問題を扱っているものだから変りながらも続いていくところはあるわけですね。人間ていうのは何といってもいちばん変らないものでしょう。さっきの、椎名誠というのは戦前でいえば亀井勝一郎じゃないかというのは、ぼくも賛成で、とてもおもしろい見方だと思うのです。つまり、両方に人生論とか倫理の問題が共通してあるわけですね。倫理とか宗教とか、教育、歴史への関心といったものはそれ自体がなくなってしまうことはないわけですね。亀井勝一郎と椎名誠が対談したらどうなるか……。

司会 若い読者を獲得しなくてはいいけない。そのためには若い人々のフィリングに合った本作りをしないと駄目だ、ということは一面あるかもしれないけれど、佐保さんのいわれるように、出版社にはそれぞれ社の主張なり、出版という営業活動を通して社会に訴えてゆく社の視座なりがあって、初めて業界としてなり立っているとも言えるわけで、若い人のフィリングに合わせてどこの社も同じ様にやっていたのでは、むしろ成り立たない

んじゃないかと思うのですね。ただ他社で刊行されたものを見ていますと、これはうちの社で出している、或いはこれこそうちの社で出すべきだったと思うようなものもあることは事実です。

ことに最近では、若い筆者たちのなかで自分の専攻の分野ではなく、他の分野の問題に大胆にアプローチをする人も出てきておりますし、それが新鮮な感覚で、こういう見方もできるのかと感心させられるものもあります。ですから編集者は限られた自分たちの普段接触する筆者だけではなく、かなり広い視野をもっていなければいけないことになります。とはいっても編集者は、それぞれ所属する出版社の枠のなかで仕事をしているわけですから、いかに売れているからといって、大衆的出版物をお出しになっている出版社の真似をして、二番煎じみたいなものを出すわけにはゆかない。仮りにテーマとして非常に面白いと思っても、うちだったらどうするか、という自社の視座を誰れもが意識すると思うんですね。それも若い編集者ばかりじゃありませんが、企画に係わる連中のなかで自社の枠みたいなものへの意識が、次第に緩和されると

いうか、変化してゆきつつあることも事実だと思うのです。その辺がやはり難しい問題だと思うんですね。

ところで、岡田さん、講演会をおやりになる時、聴衆はどのような層の方が多いですか。

岡田 それは内容によってかなり違いますけれど。万葉なんかはかなり広い層ですね。群大の先生を引っ張り出したわけですから、かなり来てくれましたよ。

細川 どのくらいの期間でおやりになってますか。

岡田 大体毎月やっていますよ。

このほかに音楽サロンというのがありまして、あとは美術展を常時やっていますよ。ホールとギャラリー両方持っていますので。

細川 うちの方も持ってますして、売場と密着した講演会というのは年に何回かやっています、ほとんど人文関係がテーマになりますね。

それは、うちの全国チェーンの独自の企画をチェーンとして展開して、その一環として講演会をやるんですが、山口昌男さんなんか非常に人気がありますね。そういう形で、

読者の開拓というか、密着させるという方法をやっております。

岡田 加藤周一さんなんか呼ぶと満員ですよ。それから「サルトル自身」と「ボーヴォワール自身」の映画をやった時もすごかったですね。その講演のあとはサイン会です。岩崎 そういのはしかし、採算はどうですか。

岡田 採算はトントンで、あるいは赤字になることがありますよ。

吉田 煥乎堂さんは、前橋の文化の象徴ですよ。

岡田 そういう役割でやってきたんですからね。お前、手づくりでやれ、そのかわり仕事は背負え、背負えばお前はもぐからって言われましてね。いま、僕が若い人言うんだけど、なかなかもぐいてくれないですね。宣伝カーを回すとか、煥乎堂企画案内っていうポスターを刷って、先生の机の上に一枚ずつ置いてこいとか、あるいは図書館の先生に郵送しろとか、いろんな方法考えるんです。ただ、本当に突っ込んでくれないです。企画した人間というのは突っ込むんです。自分が仕掛けるんだからおもしろいわけですよ。とこ

ろが若い人を動かすのはとっても難しいですね、乗ってくれないから。

岩崎 先ほど中島さんが、編集者としてこんなにおもしろい時代はないとおっしゃったのはまさにこのことで、うんと卑俗に言ってしまうと、こんなに仕掛人が仕掛け甲斐のある時期はない、ということだと思っんです。

それは、一方では誠にありがたいことなのですが、もう一方では社会の変化が大きく、かつ先きほど申した現代社会の陥穽にみなどらわれている側面があって、若い人が仕事の上でのびのびと大らかにやっていくということが、これまた難かしい状況で、待っていれば自然と自主性が出てくるという風にはなかなかいかないと思います。

それから、昨年TBSの「ザ・ベストセラー」という番組をみていたら、何人かの週刊誌の編集長たちがインタビューを受けて、こたえている中に、「みんな自分たちがつくったこの雑誌は、創刊当初と同じように若い読者がついていると思っていたのだが、五年、十年とやっているうちに、読者もそのまま持ち上っているということがわかった」というのです。なるほどと私は思いました。ですか

ら、たとえば岩波書店の出版活動それ自体は決して古くなったとは思いませんが、にもかかわらず、絶えず自分たちの側から気をつけて考えていないと、自然と読者層が持ち上るということなのです。これは容易なことではないのですが、そのことをあらためて気づかされて、このことも社内あちこちに説いてまわっているのです。勉強させられますよ。

岡田 書店も同じで、僕はみんなによく「編集者になれ」というんですよ。書店の売り手というのは全部編集者だ、とね。情報をまず早くキャッチして、いま雑誌はどんなことを特集しているか。それから組み合わせはいろいろでもできるんです。本屋ぐらいいおもしろいところはないですね。そういうのも、興味がないついてこないですね。その辺が一番の悩みです。

八 文化の継承のために

——いま何を訴えてゆくか

司会 さて、大体の問題は出たと思います。ただ、文化というのは、やはりどうしても

継承しなきゃいけない、伝承していかなきゃいけない、というのが前提だと思うんです。

そこで、若い世代にどういうふうにしてそれが継承し、あるいは伝承されていくような状況がつくれるのか、というのが問題の基本にあるんじゃないかと思うんです。

そして、若い世代——二十代の読者の関心はどこにあるのか、どうしたら受けとめてくれるのかというのが、一番大事な問題になると思うんです。日頃読者と接していच्छやる書店さんは、その点どういうふうにお考えですか。

岡田 前橋の高校生の図書館データーがあるんですけど、それをちょっとお知らせしますと、一年間の貸出状況で、一位が一二四冊、十位で四五冊。

分類から見た貸出状況といいますと、文学は全体の五六％、芸術が一二・一％、社会科学が一二・〇％、自然科学が五・八％という結果です。

だから人文社会科学の面から捉えれば、そんなに絶望的な状況でなくて、若い人もかなり期待がもてるし、あとはアプローチの仕方ですね。

この前装幀問題なんか出ましたけど、僕はそんなに気にしなくていいと思うんですが……装幀が悪けりゃ返品しちゃうとか、そんなことはまずないですからね。ただ、平積みから棚へ入れて、一週間、あるいは二週間動かなければ、担当者はおそらく返してしまします。

それからお願いしたいのは、書評みたいのが出るのが非常に遅いでしょう。出た頃にはもう返品して本がないわけですよ。だから、情報がもっと早く欲しいですね。

それと、若い読者については、専門書に近づけるような中間のものを、もう少し力を入れてもいいんじゃないかという気がします。

もうひとつ、私自身が読んでみても、人文書で翻訳物っていうのは非常に下手ですね。

読みにくいというか、かたい——まあ、原文がかたいたからそうなるんだろうけど、もう少し力を入れて読みやすい本をつくってほしいです。

司会 紀伊國屋さんの場合には、お店に来る若いお客さんをご覧になっていて、その購買状況から「文化の継承」という問題を透視すると、どうなりますか……。

細川 そうですね、いまの若い方は専門書というが古典を読まないわけではなくて、読ませ方によっては読む、ということがまず第一ですね。もう一つは、あまり人文図書の分野にこだわらないで、いまいろんな分野が入り交じっているというか、新しい分野が出てきています。ですから、そういうもののつくり方というのがあると思うんです。

人文会も纏まっているようにいて、活動は個々っていう感じが受けられるんです。じゃあ人文会で何かをやらうという共通のテーマ、そういうのがない。やはりいま新しい分野をつくっていくということも必要じゃないかと思うんです。

それともう一つ、よく読まれる著者というので、昔はプラトンとかカントとか、誰もが通過していった時期がありましたけど、それが全然読まれなくなって、少し前は吉本隆明とか小林秀雄、マルクスなんかですね。そういうように、若い人たちが一時的に一気に読み始める著者というのがあると思うんです。ですから、そういうものをまた新しくつくっていくって、与えていくということも必要ではないかと思います。

昔から歴史のある老舗の版元さんというのは、なかなか体質改善ができないんですよね。それで、どうしたらうちの出版物売れやすかって、よく質問を受けるんです。だったらそんな難しいこと言っちゃいけないで、もっと新しいものを出したらいじゃないかって言うと、著者との関係がある、何々との関係があるといつてがなじがらめなところがあるんですね。若い編集者とか著者を導入するというのは、そこにもあると思うんです。

吉田　うちの場合、四谷の店の上智大が近いし、飯田橋の店は法政大、赤坂の場合は近所に小さな女子大があるんですけど、店長がその気になって仕入れても、なかなか反応ないんですよ。結局人文書に関しても、三十代、四十代のサラリーマンの方たちがやはり主体になるんです。これはどういうことでしょうね。僕らの世代は六〇年、七〇年安保がありましたし、いろんなことがあったんで、学生時代、勉強した人が多いんですよ。そういう連中が、いまになってまた第三の青春といった感じで読み出しているんで、そういうのは馬鹿にならないんです。

サラリーマンで、たとえば赤坂の店のあた

りだと日商岩井とかトーマンとか、商社の第一線にいてあわただしく生きてるような連中に限って、人文科学——つまり人間の学としての本を求める傾向が、最近出てきましたね。ですからそれにどうしても焦点を当ててしまふので、新しい読者の開拓を、煥平堂さんの方式でやるということは、なかなか余祐がありませぬね。

司会　きのう、新しく出版社をやりたいというのが来て言うには、古典に限らず過去の出版物のなかには、せっかくな財産になるものがありながら、若い読者に読まれない。継承されていかないような状況があるのじゃないか。それを打壊してゆくためには、そういう状況の若い読者層に受け入れられるようなもののつくり方をしなけりゃいけないのじゃないかと。

昔の人は解らないながらも、読書百遍義自からあらわるじゃありませんが自分の方から取り組んでわかうという努力をしたんだけれども、いまはなかなか、若い人たちはそういう努力をするまでにはいらない。むしろ与えられるもので、一番わかりやすいものにすぐ飛びついていくという傾向が強いですね。

そういう傾向は今後もずっと続いてゆくように思うんです。

そうだからといって版元の方もこのままで突っ張っていいかというと、そうもいかない。やっぱりそういう読者を念頭に置きながら本をつくっていくかなければならないんだという気がします。

岩崎　きょうは本場に勉強になりました。

ただ、私は先きほど申しましたように、ニーズだけで本をつくるわけには断じていかなーと思うのです。

それから、本の形や内容ではなくて、これから二十一世紀にむけて、人間であれば老いも若きもかわり合う、ニーズではなくて現代社会の基礎をなしているバイオリンの弦みたいなものを、つぎのように考えているのです。

それは、一つは、核戦争が一体どうなるか。平和に生き続けたいという欲求と不安。これは、人文であろうと自然科学であろうと、また、学問や芸術の方法はいろいろであつても、そのあたりの状況の追求をめぐって、現代の弦は一本存在していると思います。

二番目の弦は、エレクトロニクス革命とか、

フラインセラムイクスだとか、あるいは遺伝子工学だとかのさまざまな現代科学技術のインパクトが、これからの人間の生活や労働にどう、なにをたらしてくるかという問題。

もうひとつは、社会の基本単位だった家族の「崩壊」という問題。この崩壊現象が、これからどうなるか、そして人間のモラルや教育にどんな変化をとまなうかという課題。

この三つの主要な弦をめぐるって、人文書であろうと、自然科学書や社会科学書であろうと、これから二十一世紀へむけてすべての出版企画はあるのではないか。これらの課題を解明し、より人間的な世の中になっていくようにありたいということ志として考えながら、あとはもういろんな状況との対応の中で、難しい本もやさしい本もつくってゆかなくてはならないと思っています。からだが元気なうちは、頑張ってやろうと……。

佐保 やつぱり二十代の編集者は欲しいですね。岩崎さんは「ジュニア新書」など自らやられて御苦労なさっていると思うんですけど、あれは私も愛読させてもらっています。高校生向きものだから、われわれは満足できないかなんてそんなものじゃなくて、むしろ

ちよつと難しいなと思うものもあるくらいです。大月でも、直接若い人を対象にした本も考えなくちゃいけないと思って、社内ですういう検討もしております。ただ、専門家はやさしくものを書くという場合、やはり、何か欠けているところがあるんですよ。学者だけではなくて、プロと素人という関係では、さっきの「最前線」もいろいろ話を聞いていきますと、プロの人ははてしなく細かくなつてき、「素人」の方は「プロ」にならない限り「プロ」の話がわからないということになつてしまふ傾向があります。

宗教の問題もつき宗教の読者は年配の方が多いとおっしゃいましたが、高校の先生に聞いても、やつぱりいまの高校生の関心は、宗教の話をするときぐく乗ってくるということなんで、これはどういうことかなと……。

細川 宗教の中でも、分野によってはお客さん、全然違うんです。

佐保 なるほど。ですから、実際に買う本は、若い人と年配じゃあ、やはり違うと思うんですけど、問題はやはり、かなり共通するようなものがあると思っているんです。

岡田 私、弁解じゃないんですけど、読者ニーズに合わせてものをつくれ、とは決して言いませんから。誤解しないでください。

最後に、群馬県立図書館の二月（22日間）の利用状況を、人文社会だけとって見ますと――。

▽哲学―三三四冊。昨年が三一〇冊。

▽歴史―五一八冊。昨年が五八四冊。

▽社会科学―一六一六冊。昨年が一五二〇冊となつています。

司会 本日は、どうも大変長時間にわたつて、いろいろ貴重なお話を伺うことができて参考になりました。テーマがテーマだけに、また司会が不馴れなもので、まとまりを欠きました。人文書の当面する諸相が充分に伺えたと思います。今後は、編集企画の面でも、販促の面でも、本日のご意見を参考にしておられるところも多かろうと思えます。本日はどうも有難うございました。

〈調査企画委員会活動報告〉

『テーマ別（新刊・常備・分類）研修会』

第一回 三省堂本支店



小会では三省堂書店グループと、去る二月に日頃から人文図書販売にご努力されている、本店の鈴木総括マネージャー以下六名、本店仕入石田、本店川野辺、名古屋店中嶋、渋谷店三浦、新宿店児玉、池袋店小島の各氏と取

次の鈴木書店の土屋部長を箱根へお招きし研修会を開催しました。今後の販売政策を考え、効果的に営業を進める為に熱心な討論の場となり大変に盛り上がった会となりました。調査・企画委員会の企画で、日頃からいろいろと話題になる問題を研究するとともに、小会

が積年の課題とする特約店政策をどのように位置づけ、方向を定めるかの糸口を見い出す事も合わせて考える目的で行われました。

三省堂書店も人文会も、事前に調査をし、準備を重ね、資料を提供しあい、それらに基づいて討議を進めました。書店の資料は、店ごと、担当者ごとの意見、数字が示され、これからの施策を進める上で貴重なものとなり、会員各社は社内に回覧する等、編集員の参考にもなりました。

討議内容は、日頃から言われている事柄と

の重複も多く出されましたが、書店・版元の共通認識をする上でも、また細かい事項でも一歩一歩お互いに接近してゆかないと、販売の現場では問題を生ずる事があると認識されました。以下テーマ別に項目をまとめると、

テーマ① 新刊について

①②への新刊搬入部数、時期（神田村取次店との比較）について……締切時期に搬入集中のデメリット……パターンによる配本の良し悪し……パターン利用版元と別版元の対応……書店搬入後のチェックと補充……新聞広

告日と発売日のギャップ……書評による効果
……新刊申し込み数の決定基準……新刊情報
の入手方法……取次・版元以外からの情報処
理……返品タイミングの見定め

テーマ② 常備寄託について

書店の選択能力について……書店の常備政
策への対応が受動的という指摘について……
新刊と比較して目配りが不足している点につ
いて……地域的、展開的に商品の画一化への
対策……買切及び寄託版元の書店アプローチ
について……回転数と管理政策について……
回転把握から売行良好書の発見実例等

テーマ③ 分類について

人文書の店頭における陳列について……人
文書と読者をつなげる分類は……クロスオー
バーした商品をどのように位置づけ、どの棚
へ置くか……NDCCやISBN等の分類は不
可……読者の変化に対応するためには等々、
以上、書店と会員とがそれぞれの分科会で
情報と意見を交換し合い、次いで全体で発表
を行ない、最後に合同討論に入り、全てにつ
いての結論には至らなかったが、各々の思い
の内にこれからの販売施策への熱意を増長せ
しめました。

最後にこれからの人文会としての活動方向
と特に人文会ニュースについての書店での利
用、編集方針、企画への希望等について具体
的な提言をもとに話し合いました。

反省としては、さらに準備を重ね、率直に
意見、提案を出し、討論を深めて研修を重ね
る必要も痛感しました。

三省堂各店の皆様には、調査・準備と参加
を厚く感謝申し上げます。

(報告・文責弘報委員会)

なお、小会では引き続き、販促のための研
修を実施する予定です。特に各特約書店との
交流、意見交換をし、認識を近づけ、会とし
ての政策はもとより、会員社の販売施策にま
でも延長できるような企画中です。

今回の三テーマは、その際に常についてま
わる問題です。軽々に結論づけられませ
んし、容易にかたづけられませんか。研修を繰り
返しつつ、方向を定めてゆく考えです。

第二回は大学生協との会を予定していま
す。特約書店へ研修のお願いの節にはご協力
の程お願い致します。

〈人文会 総会速報〉

雄山閣及お茶の水書房の

入会決定

小会の第十六回総会(五月十三日開催)
において、かねてから入会希望のあった
前記二社の入会が承認された。これによ
り会員社は二十三社(休会中一社含)と
なり、さらに会の構成員が強化され、人
文図書の普及・販売という所期の目的を
促進する力が増加した。

新規会員二社の新鮮な意欲と積極的な
参加が期待されている。

尚、総会において例年のとおり、活動
方針、幹事構成が討議され、幹事には中
平会長(東大出版会)、相田代表幹事(み
すず書房)以下、各委員長、書記は再選
され、会計幹事に篠崎氏(福村出版)が
選出された。

人類の森・知の森・危機の森

— 文化人類学展覧 —

人文圖書の最前線——棚の前で

「文化人類学」と名のつく本を一冊も出していない小局に、どうしたわけか本講座の出版が回ってきた。やむを得ず、都内の書店数箇所を訪ね、文化人類学の棚の写真を撮らせていただいた。まずはフィールド・ワークというわけである。泥縄式の勉強は情けないもので、本の背中の写真を見ながら、へえこんな本が出てくるのか、やや妙な本が紛れ込んでいるゾ、うむこの背中のデザインは目立つな……、まるで華やかな街頭風景でもあきずに眺めるような按配で、肝腎の問題にはちっとも進めない。

それにしても文化人類学・民族学の棚というのは、何と賑やかなことか。試みに、その題名からテーマを拾ってみる。神話、性、分類、人喰い、宗教、共同体、死、葬式、道、仮面、社会、儀礼、婚姻、男、女、子供、祭、犯罪、祖先崇拜、狩猟、農耕、肉體、シヤーマニズム、遊び、音楽、家族、親族、経済、人相、秘儀、道化、病氣、風俗、言葉、食事、料理、貨幣、バーソンナリティ、狂気、錯乱、都市、貧困、動物、本、人種、呪術、生活、伝説、水、火、紛争、自然、ユートピア、民族、民話、石、化粧、戦争、象徴、服飾、文字、道具、心、聖、コミュニケーション

ン、法、技術、しぐさ、稲作、そして文化・文明・未開・野生等々。すなわち人事百般・森羅万象・神社仏閣、時間の軸と空間の軸、ともに伸びるだけ伸びて、まさに百花繚乱。相当したたかな読書人でなければ、棚の前ですでにぼうっとなつてしまうような凄さである。これから先、何が出てくることか。

だが、よく見ると、考古学、形質人類学、社会学、民俗学、民族誌、言語学、文化史、思想史、文学、歴史学、はては観光案内に近いグラフまでしたり顔におさまっていたりして、これが文化人類学そのものでござい、という本はそんなに多いわけではない。しかも

法政大学出版局 平川俊彦

昨今、経済人類学（ボランニール）、法人人類学、都市人類学、音楽人類学、医療人類学、認識人類学、芸能人類学、象徴人類学、政治人類学、歴史人類学（アナル派）、映像人類学、心理人類学、教育人類学等々という具合に、各論的に分化（あるいは他の専門分野へ進出？）してきている。この調子でゆくと、その好況にあやかろうとする「○○人類学」がわんさと出てくる可能性もある。新興住宅地「△△ガ丘」の伝である。（今出ている本はさにあらず。念のため）「文化」などという概念が、要するに人類が作り上げてきた物すべて、みたいなことになっているから致し方ない話だ。

とはいえ、文化人類学という学問、あたかも強力な磁場のように、実に広大な分野の知的関心を自らの方へ引きつけている、という事実は認めざるを得ない。M・フーコーは、かつてこの点について、次のように述べた。「精神分析と文化人類学は、……他のものと同列におかれる人文科学ではなく、人文諸科学の全領域を通覧し、その全表層にわたってそれを活気づけ、あらゆるところに自らの概念を広め、あらゆる場所に自らの解説の諸方

法と諸解釈とを提示することができる。いかなる人文科学も、この二つを免れ、この二つが発見しえたものから完全に自立し、どのようなやり方にせよ、この二つにたしかに依存しないと確信することはできない。」（渡辺一民・佐々木明訳『言葉と物』、新潮社）

ともあれ、多彩なテーマ、他の分野との連携、多少雑然としても活気ある知的生産性、吸引し拡張し流動する棚のダイナミズム、いづれをとってみてもこの学問は、今日人文図書の前線に位置していると見てよさそうである。

文化人類学の戦略

では、この学問の影響はどれほど広い範囲に及んでいるか。言い換えれば、現代の思想・学問は文化人類学からいかに多くのものを摂取しているか。

ざっと見ても、大江健三郎『小説の方法』、藤田省三『精神史的考察』、真木悠介『時間の比較社会学』、竹内芳郎『文化の理論のために』等をはじめとして、中村雄二郎、中尾佐助、佐々木高明、神島二郎、今村仁司、いだいとも、作田啓一、篠田浩一郎、由良君美、丸山静、吉本隆明、渡辺守章、蓮実重

彦、上山春平氏その他、文学・哲学・社会学・政治学などの人文・社会科学者はもとより自然科学者のうちにも積極的これを摂取してゆこうとする姿勢がうかがえる。世界的に見れば、現代の思想界をリードする人々のほとんどが何らかの形で文化人類学について言及し、これを評価・吸収している。すなわち、M・フーコーや故R・カイヨワ、故R・バルトをはじめとして、ル・クレジオ、オクタビオ・パス、ボルヘス、ケネス・バーク、E・カネッティ、E・モラン、J・ボードリヤール、ルネ・ジラール、J・デリダ、N・フライ、M・ビュトール、S・ソンタージュ、J・クリステヴァ、G・ドゥルーズ、J・ルゴフ、T・トドロフ、G・スタイナー、S・モスコヴィン、P・ヴェニス、G・カーク等々。

このような傾向は、文化人類学の学問的成果の単純な波及によるだけではない。むしろこの学問は、あらゆる知の分野に進出することを一つの戦略とさえしている。山口昌男氏は、「私は文化人類学が独立した学問分野として閉鎖的な完成度を高めるよりも、あくまでも諸々の分野の中に組み込まれることによって、それぞれの分野の持つ潜在的な主題を

浮上させる手懸りを提供する知の技術としての役を果たすところに、その独自の立場を貫いた方がよい」という（『文化人類学への招待』）。「知の技術」といえば、梅棹忠夫氏の『知的生産の技術』や川喜田二郎氏のKJ法を思いおこす人も多いだろう。文化・社会人類学者たちが「知の技術」を問題とし、技術としての知を開発してゆこうとするのは決して偶然ではない。

彼らのフィールドは、サバンナや熱帯ジャングル、砂漠や極地ばかりではない。つまり、無文字社会や未開社会ばかりでなく、文字・言語・書物・記号といった、R・フォックスのいう「知のジャングル」、さらに情報の氾濫する高度文明社会の「コンクリート・ジャングル」にまで、それは及んでいる。彼らは探検・冒険・調査・収集の足を至るところにのばす。土器の破片や病原菌のうごめきやチンパンジーの動作や古文書のしわの間の文字のかすれや、そうしたものを十年一日の如く眺めている古いタイプの職人的研究者とは、全く無縁とは言わないまでも、相当様変わりしてきている。彼らの行動範囲はあたかも商社マンの如く、書物をあさること古書商

のつわものの如く、語ることディスク・ジョッキーの如く、書くこと流行作家の如くである、と言おうか。

フィールド・ワークの位置づけについては色々議論がある。しかし、外から見るとは、野外調査も文献的研究も彼らにとってひとしなみの文化人類学的フィールド・ワークと映る。この積極果敢、身軽さ、柔軟性が身上である限り、フーコーの言う意味での文化人類学の「君臨」も、かつての神学や哲学のような専制君主的なものにはなるまい。むしろ、それよりも先にのべた土建業の人類学に陥りかねないスノビズム（版元の誘導による側面も見逃せない）が、この学問の一部に「知的スラム化」（フォックス）をもたらす危険性はあるかも知れない。

ただ、文化人類学という学問は、不思議なと言おうか当然なと言おうべきか、そうした自らの置かれた位置の確認とたえざる自己点検においても誠に精を出す。「他」を知って「自己」を考えるという方法は、たしかに根強い。

他者を介して自己を見る

本多勝一氏がベトナム戦争のさなか、「調

査される側の論理」という視点から文化人類学者の原住民調査にひそむ問題点を指摘したことはよく知られている。文化人類学者は、かつての宣教師や略奪的探検家の末裔ではないか、とする本多氏に対し、山口昌男氏は、いわゆる「非西欧的世界」の認識にこそ文化人類学の助力が必要であり、そうした知見は西欧的世界が自らの限界を突破してゆくためにも不可欠であると反論した。異郷における他者との対話の緊張も「己れの価値で他者を量るのではなく、他者を媒介として己れを量る」ための眼を形成する必須の「イニシエーション」であればこそ、フィールド・ワークの情熱をかき立てるのだと、山口氏をはじめ多くの文化人類学者は言うのである。

だが、この問題は根深い。レヴィ・ストロースもかつて次のように述べている。「人類学は、遠くにある物体を考察することから始まる天文学のような冷静な学問ではない。それは、人類の大部分が少数の者に従属を余儀なくされてきた歴史の道筋から生じたのである。その間には、幾百万という罪のない人々が、その財産を略奪され、その制度、信仰を破壊され、また彼ら自身は無慈悲に殺され、

奴隸の身にされ、抵抗しがたい病気に犯されたのである。人類学は、この狂暴な時代の産物なのである。人類学が、人間の状態に関したことがらを、より客観的に評価する能力を持つているということは、認識論的立場から言えば、人類の一部分が他の部分を物体として取り扱った時代があったことをまざまざと示している。……西洋世界だけが人類学を生み出したのは、その精神面での能力のためではなく、むしろ私たちが、異国風の文化をたんなる物として扱い、従って物として研究できたという事実の結果によるのである。」(スミソウニアン研究所編・荒正人訳『現代文明と科学』、法大出版局)

文化人類学の外からの批判も厳しい。J・デリダは、未開社会の「処女空間を無理矢理犯す」民族的侵入について語ったし(『グラマトロジーについて』、ボードリヤールの、人類学や精神分析学がかくも驚くべき発達をとげたのは、原住民や患者たちの権利を踏みにじってしまう「問い」によっている(『象徴交換と死』)とする指摘は、レヴィ・ストロースの言明と呼応し、かつこの学問の方法の問題に立ち入っている。

しかもこの学問が自ら集積した膨大な知見によって「人類文化」を大いに論じようとする現代という舞台では、周知のように人類自体が絶滅の危機に直面している。G・スタイナーは、七〇年代初頭、拷問・大量殺人・飢餓・幽閉にみちた破局的状況を招きつつある「ガス焼却炉、極寒の収容所、ナバーム爆弾の時代に、文化の定義を議論するなど、ただ愚劣であり、わいせつですらある」(『青猿の域にて』)と言い切った。新植民地主義と公害企業の世界征覇によって、文化人類学者たちのフィールドが失われてしまうのではないかとて、「緊急人類学会議」なるものが開かれたという。未開社会が未開でなくなる前に、何とか彼の社会の情報収集だけでも済ませたいという、いささか火事場泥棒的な発想が実際にあったものらしい。未開社会・文明社会ひっくるめて、人類社会が丸ごと危ういのであれば、今緊急に必要なのは、ホワイト・ハウスやペンタゴン、国際企業の事務局等の調査ではないか、と言ったのはフォックスである。

またE・モランやR・ジラールのような、文化の根源に人間の狂気や暴力を指定しよう

とする思想家の出現は、文化の豊かで幸せな様相を歌い上げてきた凡百の文化論を震撼させ、その「イデオロギー」をゆさぶるに充分なものがある。

構造主義を超えて

私たちは、文化人類学がまさに大発見時代以来数世紀に及ぶ伝統をもち、十九世紀からの知的大変動を経て現世紀後半に飛躍的な発展をとげた学問であることを知っている。石田英一郎氏が言ったように、文化人類学は、諸民族の基調的な文化の多様性・異質性・相対性という事実に対する強烈な関心から出発して、これらの差異の底を貫く一様性・同質性・普遍性の認識に達し、これをもって人類と人類文化の概念を発見するとともに、これを全面的・総合的に追求することを可能にしたのである(『文化人類学入門』)。

西欧中心主義・自民族中心主義が生み出したものでありながら、逆にそれを最もラディカルに批判するものとなった。現代における価値の多元化・相対化を惹起する一つの有力な震源地は文化人類学である。また、学問と常識、専門家とアマチュア、専門分野間の障壁を取り除き、トータルな「知」の世界を展

開しようとする。こうした積極面をこの学問がもつことを誰も否定できないであろう。

そこで、人類の森・知の森の探索者であり同時に危機の森の住人であることを自覚している文化人類学は、今後どのようなテーマをどのように追求してゆくものであろうか。

私は二つの戦線に期待する。一つは人文・社会科学、そして自然科学をもふくむ総合的な人間科学の構築、そのための組織者の役割だ。形質人類学や先史考古学、分子生物学やエコロジー・情報理論等々との連携の中で、とりわけE・モランの描く人間の「超複雑性」の解明に向けて、文化人類学は豊富なデータと経験をもつて貢献することができだろろう。モランは、人間の極めて高度な複雑性は、その「異質合体性、弁証法性、不安定性」に、究極的にはホモ・サピエンスとホモ・デメンス（錯乱の人）の像の間の不確定性に根ざしている、という（『基礎人間学』下）。

このような総合的・学際的な戦線における文化人類学のテーマの一つに、私は石田英一郎氏が繰り返し提案していた「書かれざる人類文化史の再構成」という壮大な構想をあげてよいと思う。（小局の『叢書・ものと人間

の文化史』もそうしたねらいにつながっている。民俗学のシリーズと思われがちだが、決して一分野の視点にとらわれてはいない。）

もう一つの戦線は、ある意味では伝統的な人類学の仕事ということになるうか。すなわち、オスカー・ルイスのいう「片隅の記録者」としての仕事である。世界人口の約八〇パーセントを構成する低開発諸国の大半を占める農民や都市の住民に関する研究者及び記録者としての役割をはたし、彼ら「無文字の住民の代弁者」となる（『貧困の文化』）ことは、この学問の初発の志の一つであつただろう。R・フォックスの「マージナルな人類学者」、ウィクター・ターナーのような反構造と周縁的なものの意味を問い直そうとする人類学、R・ジラールや山口昌男氏のようなスケープ・ゴートの探求、同時代への批判の学等々は、今後なお多くの豊かな成果をわれわれにもたらしてくれるものと思われる。

六〇年代の後半から七〇年代半ばにかけてわが国でも「流行」を見た構造主義は、とくにレヴィ・ストロースらによって文化人類学の画期的な発展をもたらしたことは周知のことだが、七〇年代後半から、その限界の克服

が模索されている。構造主義を発展的に乗り越えることによって文化人類学のより一層の発展が可能となろう。

最後に、先頃亡くなった人類学者金岡文夫氏のような博学の伝統も、文化人類学に永く生きのこってほしい。氏は、仏典の一挿話と中国の古い随想を引きながら、「インドには途方もない時間があつたのだ。そこで考えられなかったことは、何もない」、「なんと、中国というところは、途方もない拡がりをもっていることだろう。そこで起らなかった出来事は、何もない」（『長屋大学』）と言う。この人間世界の「途方もなさ」への驚きと感受性、そして象を撫でることを厭わぬ群盲の果敢さこそが博学の種となる。それが、自らの足元に忍び寄る時代の危機に「魂をおののかせ続け」、「絶えず鋭く焦点を合わせ続け」ねばならないと言ったスタイナーの自覚と結びつくことこそが、今なによりも必要なのではなからうか。

再び棚の前で

総花式・境界不明・雑居的であることを恐れず、思い切り賑やかにレイアウトしていただくのがよろしいかと思う。その上で、書店

の立地条件に応じた関連書の配置が考えられるべきであろう。以下、現在流通のものの一部でしかないが、書目をあげておく。

〔事典・叢書・講座等〕祖父江孝男他編『文化人類学事典』ぎょうせい、紀伊国屋書店文化人類学叢書（ターナー『象徴と社会』、リーチ『文化とコミュニケーション』、同『神話としての創世記』、バランディエ『黒アフリカ社会の研究』他）、弘文堂人類学ゼミナール（ヘネップ『通過儀礼』、グッドイナフ『文化人類学の記述と比較』、スチュワード『文化変化の理論』他）、雄山閣『人類学講座』全13巻別巻3（自然人類学が中心）、佐野真編『文化人類学研究文献要覧』日外アソシエーツ（紀伊国屋書店発売）など。

〔概論・入門書〕石田英一郎『文化人類学ノート』新泉社、同『文化人類学入門』講談社学術文庫、石田英一郎他『人類学』東大出版会、片倉もとこ他『文化人類学』八千代出版、野口隆・大森元吉『文化人類学概論』法律文化社、蒲生正男他編『文化人類学』角川書店、姫岡勲『文化人類学』ミネルヴァ書房、タイラー『文化人類学入門』太陽社、リントン『文化人類学入門』東京創元社、祖父江孝

男『文化人類学入門』中公新書、吉田禎吾編『文化人類学読本』東洋経済新報社、リーンハート『社会人類学』岩波書店、ビーティ『社会人類学』社会思想社、高山龍三『ヒト・文化・文明』八千代出版、寺田和夫『日本の人類学』思索社、など。

〔雑誌・年報〕京大人類学研究会編集『季刊人類学』講談社、都立大学社会人類学会編集『年報社会人類学』、他に『民族学研究』『季刊民族学』、など。

〔古典〕モース『社会学と人類学ⅠⅡ』弘文堂、デュルケム&モース『分類の未開形態』法大出版局、ローウィ『原始社会』未来社、マリノウスキー『未開社会における犯罪と慣習』新泉社、同『未開人の性生活』同、同『文化の科学的理論』岩波書店、フレイザー『金枝篇』岩波文庫、ラドクリフ・ブラウン『未開社会における構造と機能』新泉社、E・ブリチャード『ヌア族』岩波書店、同『ヌア族の宗教』同、ベネディクト『菊と刀』社会思想社、同『文化の型』同、など。
〔レヴィ・ストロース〕『親族の基本構造上下』番町書房、『構造人類学』人種と歴史『野生の思考』他みすず書房、『悲しき熱帯

上下』中央公論社、『仮面の道』新潮社、『アスディワル武勲詩』青土社、など。

〔山口昌男〕『新編人類学的思考』筑摩書房、『道化的世界』同、『文化と両義性』岩波書店、『知の遠近法』同、『アフリカの神話的世界』『文化人類学への招待』岩波新書、『道化の民俗学』新潮社、など。

〔各論・話題の書〕青木保『タイの僧院にて』中央公論社、同『文化の翻訳』東大出版会、梅棹忠夫『文明の生態史観』中公、谷泰『牧夫フランチェスコの一日』日本放送出版協会、原ひろ子『子どもの文化人類学』晶文社、川田順造『無文字社会の歴史』岩波、アウエハント『鯨絵』せりか書房、ボランニール『人間の経済ⅠⅡ』岩波、栗本慎一郎『経済人類学の眼』青土社、ローハイム『精神分析と人類学』思索社、フォックス『人類学との出会い』同、リーチ『人類学再考』同、田中二郎『ブッシュマン』同、ターナー『儀礼の過程』同、ルイス『ラ・ビータ』みすず書房、ホール『かくれた次元』同、メリアム『音楽人類学』音楽之友社、クローバー『イシ』岩波、タインブル『森の民』筑摩、オズワルト『食料獲得の技術誌』法政、カスターナダ『呪

術師と私』他二見書房、サビア他『文化人類学と言語学』弘文堂、アレンズ『人喰いの神話』岩波、石毛直道編『世界の食事文化』ドメス出版、ルークス『肉体』マルジュ社、泉靖一『フィールド・ノート』新潮社、綾部恒雄編『女の文化人類学』弘文堂、中根千枝『家族の構造』東大、フォックス『親族と婚姻』思索社、佐藤誠三郎他『文明としてのイエ社会』中公、マリノウスキー他『婚姻』社会思想社、遠藤紀勝『仮面と祝祭』三省堂、川喜田二郎他編『人間——人類学的研究』中公、梅棹忠夫他『食事の文化』朝日新聞社、ラディン他『トリックスター』晶文社、ホル『文化を超えて』TBSブリタニカ、中尾佐助他『社会文化人類学』中公、梅棹忠夫『人類学周遊』筑摩、など。

〔関連書〕モラン他監修『基礎人間学上下』平凡社、『エリアーデ著作集』全13巻せりか書房、弘文堂ふおるく叢書、法大出版局もの人間の文化史、筑摩書房『新編柳田国男集』全12巻、未来社『宮本常一著作集』全25巻、平凡社『南方熊楠全集』全12巻、社会思想社『馬淵東一著作集』全3巻、金岡丈夫『日本民族の起源』『形質人類誌』他法政、

小学館『日本民俗文化大系』全13巻、平凡社『イメージの博物誌』全16巻、同『世界の民族』全20巻、リーキー他『オリジン』平凡社、フーコー『言葉と物』新潮社、ラデュリ『新しい歴史』新評論、ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』中公、クリステヴァ『ことば、この未知なるもの』国文社、セミヨーノフ

《人文会・伝言板》

●人文会恒例の秋の研修旅行は、本年度は九州北部地区（福岡、長崎、大分）と決定、目下スケジュールを検討中です。この研修旅行では特約店、常備店の書店様を中心に訪問し、人文書の普及と拡販について、会員社と書店様との意見交換を通し相互理解を一段と深めたいと存じます。

●人文会が作成した新刊一覧に基づき、紀伊國屋書店営業本部が企画した「キノモビル」は、人文会々員社の新刊一〇〇〇点を移動車に展示し、約二ヵ月にわたり、受注活動を展開するもので、すでに東北地区を打ちあげ、中国、四国、関東、北陸地区を巡回する予定です。

『人類社会の形成上下』法政、カネッティ『群衆と権力上下』同、モラン『失われた範列』同、ジラール『暴力と聖なるもの』同、岡崎照男訳『パラギ』立風書房、など。

（ご協力いただいた書店各位に御礼申し上げます。）

●前橋・煥乎堂では「今あなたなら」というテーマで人文書フェアを準備です。展示書籍八〇〇点、期間は八月五日より約十日間で、地域読者の開展と獲得に意欲を燃しています。なお期間中広松渉東大教授の講演を予定しております。

●八三年版「人文図書総目録」及び「歴史図書総目録」が、七月末刊行の予定で目下進行しております。予約注文受け中でございますので、各取次へ注文下さいますよう。柵の補管や客注品の検索等に活発なご活用をお願いいたします。

●「仏教書総目録」が、本年より刊行になります。人文図書目録より仏教書のみを独立させ、二五〇〇点を収録してありますのでその向きの拡販にご活用下さい。

人文会会員名簿

(113-91 東京都文京区 本郷局私書函89号)

58. 6. 20現在

	社 名	担当者	☎番号	所 在 地	電 話
幹 事	青 木 書 店	山根 襄	101	千代田区神田神保町1-60	292-0481
	大 月 書 店	原田 敦雄	113	文京区本郷2-11-9	813-4651
	御茶の水書房	和田 充博	102	千代田区九段北 1-8-2	230-2510
	紀伊國屋書店	佐久間健雄	102	千代田区五番町12 ドミール五番町	263-9006
休 会 中	勁 草 書 房	氏家 富男	112	文京区後染2-23-15	814-6861
	現 代 思 潮 社	安藤 豊	112	文京区小日向1-24-8	943-4406
	社 会 思 想 社	渡辺 和彦	113	文京区本郷1-25-21	813-8105
幹 事	春 秋 社	神田 治	101	千代田区外神田2-18-6	255-9611
幹 事	晶 文 社	萬洲 隆男	101	千代田区外神田2-1-12	255-4502
幹 事	誠 信 書 房	浜地 正憲	112	文京区大塚3-20-6	946-5666
	筑 摩 書 房	菊池 明郎	101	千代田区神田小川町2-8	291-7651
	東海大学出版会	岡田栄三郎	160	新宿区新宿3-27-4 東海ビル	356-1541
	東 京 創 元 社	長谷川 裕	162	新宿区新小川町1-5	268-8231
会 長	東京大学出版会	中平千三郎	113	文京区本郷7-3-1	812-2111 内7955
	〃	竹内 康一	〃	〃	811-8814
	日 本 評 論 社	後藤 光行	160	新宿区須賀町14	341-6161
幹 事	福 村 出 版	篠崎 雅昭	112	文京区小石川1-3-17	813-3981
	平 凡 社	鈴木喜久三	102	千代田区三番町5 Kビル	265-0455
幹 事	法政大学出版局	市川 昭夫	106	港区南麻布2-8-4	453-0717
代表幹事	み す ず 書 房	相田 良雄	113	文京区本郷5-32-21	814-0131
	未 来 社	藤森 建二	112	文京区小石川3-7-2	814-5521
	雄 山 閣 出 版	武 一雄	102	千代田区富士見2-6-9	262-3231
	有 斐 閣	佐藤 進	101	千代田区神田神保町2-17	265-6811
	吉 川 弘 文 館	川越 重行	113	文京区本郷7-2-8	813-9151

販売委員会 ◎浜地 氏家 佐久間 岡田 後藤 武

弘報委員会 ◎神田 原田 和田 渡辺 鈴木 佐藤

調査・企画委員会 ◎萬洲 竹内 菊池 長谷川 川越

◎印は委員長

日本名僧論集

■全十巻の構成

白抜数字は既刊

- | | | | | |
|------|------|------|------|------|
| ⑤ 穀尊 | ④ 源重 | ③ 空源 | ② 最澄 | ① 行基 |
| 忍性 | 源 | 信海 | 澄 | 鑑真 |
| ⑩ 一休 | ⑨ 日蓮 | ⑧ 道元 | ⑦ 親鸞 | ⑥ 法然 |
| 蓮如 | 蓮 | 元 | 然 | |
- (分売自由)

吉川弘文館
東京都文京区本郷7丁目2番8号・『内容見本』呈

6月20日刊行開始

愛と平和に生きた、らいてう八五年の生涯 平塚らいてう 著作集 全7巻

編集委員 大岡昇平・櫛田ふき・古在由重・小林登美枝・築添曙生・丸岡秀子・米田佐代子
各巻の内容 ①青嶺／②母性の主張について／③社会改造に対する婦人の使命／④むしろ性を礼拝せよ／⑤婦人戦線に参加して／⑥娘に母の遺産を語る／⑦私は永遠に失望しない
隔月10日刊・46判・各3000円

東京文京本郷2-11 大月書店 電話 03 (813)4651

尾形 憲著

46判 定価一四〇〇円

素顔の学生たち

―学びとの出会い― 学生たちはいま、なにを
考え、どんな生活をおくっているか――三無と
かシラケ世代とかいわれるマスプロ大学の学生
群像を赤裸々に映し出すとともに、さまざまな
過去を背負った若者たちが、著者のユニークな
講義をつうじて、「学び」にめざめ、みごとな行
動力を発揮してゆく姿をいきいきと描き出す。

東京神田 青木書店 神保町 1

反抗と自由

E・フロム／佐野哲郎訳

あらゆる偶像と政治的イデオロギーへの順応主義を
排し、社会の狂気Ⅱ核への批判を貫いたフロムの
思想の骨格がよくうかがえる九篇のエッセーを収む。

羞恥の構造

対人恐怖症 精神病理 内沼 幸雄

対人恐怖症とは赤面できない病である。本書は羞
恥を人間の精神力動の基礎にすること、深層か
らの人間理解、日本文化論に斬新な視点を提供する。

嫉妬の構造

荻野 恒一

人はなぜ嫉妬するのか。精神医学の立場から、分裂
病、躁うつ病等の嫉妬妄想の臨床を通して嫉妬をめ
ぐる様々の問題に答え、人間の深層を浮彫りにする。

紀伊國屋書店

東京都新宿区新宿 3 (354)0131

しつけいと
夢の驥米

—メディアの心理学—

箱崎総一 定価2300円

言葉が無機質な記号と化し、その意味と立体感を失ったいま、語るべき自分を見失い、都市の迷路に佇む僕たちのための『精神世界のBASIC・MAP』
自己再発見のためのマニュアル

**自然農法
わら一本の革命**

福岡正信 定価1600円

いま世界的ブームを呼んでいる『緑の革命』運動の生みの母と言われる著者がその行動原理をズバリ明らかにした注目の書!

東京・千代田区 外神田12-18-6 春秋社 ☎(03)255-9611 振東京8-24861

仕事! WORKING

S・ターケル 中山容他訳 新聞配達からスポーツ選手まで、115職種133人の実在の人々が、自分の言葉で「働くこと」「生きること」を語る。全米で長期ベストセラーの本。3800円

しゃくじょう
道化と笏杖

W・ウィルフォード 高山宏訳 愚行とは何か。道化とは何者か。中世愚者文学からサーカスの道化まで、人間性の本質をなす愚行の解明に挑む、決定版・道化大全。4200円

英国生活物語

W・J・リーダー 小林司 山田博久訳 学校、鉄道、郵便、病院、娯楽。19世紀イギリスの民衆生活を形づくった事物や制度や風俗を通して、その時代の精神を読む。1800円

晶文社 東京都千代田区外神田2-1-12 電話(255)4501

日常と行動の記号論

講座・記号論 経済、社会制度を捉え直し、手話、広告等日常のテーマに接近。全4巻完結/各二七〇〇円 300

シャイネス へ全2冊

フィリップ・G・ジンバルドー/木村駿・小川和彦訳 内気、恥ずかしがりの原因と克服法。各一七〇〇円 250

暴力のオントロジー

今村仁司 平和主義者の迷妄を打ち砕き、社会形成の基底に存在する暴力の根源性をえぐる。一八〇〇円 250

主婦論争を読む 全記録 I II

上野千鶴子編 主婦のあり方をめぐる論議のなから、主婦の自立と解放のゆくえを考える。各一九〇〇円 300

東京文京 後楽2-23

勁草書房

振替東京 5-175253

社会思想社

●大英帝国の植民地経営の基盤は「植物」にあった!
グリーンウェポン

★植物資源による世界制覇 定価二〇〇〇円

L・H・ブロックウエイ/小出五郎訳 現代の核兵器に劣らぬ力を持っていた植物という緑の兵器、グリーンウェポンのもたらした政治的社会的インパクトを跡づけ、その役割を再考する。四六判・二八八頁

新版 **一粒の麦** 賀川豊彦著

著者の数多い小説の中でも最高傑作。かつて海外でも異常な反響を呼んだ愛と信仰の物語「教養文庫」五六〇円

東京都文京区本郷1-25/電話(03)813-8105

東海大学出版会

無の贈与祭りの意味 するもの

ジャン・デュヴィニョー 利光哲夫・塚原史・石田和男訳 フランス構造主義の衰退後に現われた、時空をかけめぐる、開かれた記号論 / 定価2500円

民衆文化の記号学 先覚者ボガトウイリョフの仕事
桑野隆著 民衆演劇を中心とした民衆文化をめぐる記号学的研究に焦点をあてた話題の書。 定価2200円

北欧演劇論 ホルベア・イブセン、ホストランドベリ、毛利三彌著 北欧演劇の流れと特質を対話形式で紹介する、初めての北欧演劇入門書。 定価2200円

古地図抄 日本の地図の歩み
室賀信夫著 古代の開田地図から近世の伊能図に至る日本地図史近刊3000円

東京都新宿区新宿3-27-4東海ビル
電話(03)356-1541 振替東京0-46614

誠信書房

東京都文京区大塚3-20-6

人間関係の心理学

斎藤 勇編 一般の人の心理学への関心に応えられるようなテーマを中心とし、また興味深い理論や実験90項目をトピックスとして詳しく、やさしく説明している。 二二〇〇円

女性の不安

H・ドゥロシス／斎藤 学訳 基本的不安や環境による不安にうもれた悲感的で自己破壊的な生活パターンを、より希望に満ちたものに変えるという人間への信頼に満ちた書。二五〇〇円

現代社会科学叢書

四六判／既刊40冊／目録呈

J・B・ペリー&M・D・ピュー 集合行動論

三上俊治訳 三一〇頁 一、五〇〇円

災害パニック、暴動などの集合行動について、最新の理論的發展に、人類学、心理学、社会学各分野の文献も用いてその構造と機能を明らかにする。

E・ジェルビ 生涯教育

前平泰志訳 一、五〇〇円

82年未来日、鮮烈な問題提起で注目されたユネスコの生涯教育担当官である著者が、独自の視点から展開する生涯教育論。

フロム自由からの逃走 1200
校の社会 1100
ブラスティン 幻影の時代 1500
脱学

東京創元社 東京新宿新小川町



知識と情報のリフレッシュ!

ちくまセミナー

●好評発売中 各780円

1 思考の整理学

外山滋比古

2 現代サラリー作法

竹内 宏

3 生気開放の健康学

千葉康則

4 文章トレーニング

白井健策

5 異文化交際法

林 勝一

6 文科系の技術読本

森谷正規

筑摩書房

東京神田

小川町2

西欧政治思想史
〈全5巻完結〉

I 政治哲学と政治の生誕
II キリスト教と政治思想
III マキアヴェリとホッブズ
IV 自由主義と政治哲学の凋落
V 組織化時代の政治思想

定価1400~1800円

キリスト教と政治思想

西欧政治思想史II

四六判/定価一八〇〇円

S・S・ウーリン著/尾形典男 福田敏一・有賀弘訳
初期キリスト教時代を展望するとともに、キリスト教が政治の世界に新しい諸観念の源泉を提供していく過程をルター、カルヴァンに至る変遷を追いつながり描く。

東京・文京
小石川1-3

福村出版

電話(03)
813-3981

仏教入門

高崎直道著

仏教の基本である仏・法・僧の三宝にもとづいて、広い視野から宗教としての「仏教」の体系を明らかにする。これから仏教を学ぶ人のために、宗派の発生する以前、仏教の原点に立つ理解をめざすもの。歴史上、仏教がつめてきた深い教学の森に確かな道筋をつけ、原始仏教、小乗、大乘の教えをわかりやすく説く。1600円

中国仏教史

2 受容期の仏教

鎌田茂雄著 定価 9000円

東京大学出版会

113 文京区本郷東大構内 ☎03-811-8814

日評選書

著作権とその周辺

阿部浩二著

四六判・定価一八〇〇円

海賊版、◎表示とⓈ表示、著作権者名詐称と代作、パブリシティの権利、キャラクターと著作権、貸レコード問題など、著作権に関するここ二十数年間の新聞・雑誌記事の切抜きから、著作権審議会委員である筆者が三七のテーマを選んでエッセイ風に書き綴った好読物。

日本評論社 東京都新宿区須賀町14

幸福な死に方とは

●中村元・武藤義一・雲井昭善他

■定価980円

第一線の医師と仏教者が四つに組んだ画期的なシンポジウム。葬式を営むだけが仏教者の務めではないはずだ。高齢化社会を迎え、安楽死、ホスピスなど、死が大きな社会問題となっている今日、仏教者はなにをなすべきか、齒に衣を着せぬ議論を展開。

〒102 東京都千代田区三番町5

平凡社

非売品

昭和58年6月20日発行 年4回発行 第38号

発行所 人文会 みすず書房内

〒113 東京都文京区本郷5-32-21

(113-91 東京都文京区 本郷局私書箱89号)

回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印